やまざと

木場潟から望む白山（by N.Toga）

金沢大学ワンダーフォーゲル部 OB 会会報　vol. 26

目　　次

今年のトピックス　～東日本大震災～			1
岩手県大槌町ボランティアツアー報告	11 期	青柳 健二	2
山小屋酒場 2011	20 期	久富 象二	5
ＯＢ南竜集中ＰＷ2011	8 期	山村 嘉一	7
野沢温泉は最高に愉快だ!!（2011 スキー合宿総括）	11 期	青柳 健二	8
近畿支部活動報告	ＯＢ会事務局		10
「ＯＢ会中部支部」をつくろうかと（協力していただける方の募集）	24 期	坪井 陽典	15
ハイデルベルクとオックスフォード2つの大学都市を訪ねて	17 期	小島 敬	16
ガン闘病の記	6 期	合津 尚	19
還暦のキリマンジャロ	15 期	舟田 節子	21
15 期 還暦同窓会	15 期	舟田 節子	23
妙高・頸城山群の山スキー	26 期	畠山 潤	25
現役生のページ			30
ＯＢ会会計報告、編集後記			35

表　紙　の　言　葉　（栂 典雅）

あたりまえのことではあるが、金大ワンゲル部員が最も多く登った山は、やはり白山であろう。ぼくが現役の頃は、毎年、さまざまなコースの PW が企画・実施され、夏山合宿のトレーニングを兼ねた全パーティによるプレ合宿が行われたこともあった。

ただ登るだけでなく、白山研究会という会があったり、山小屋のアルバイトをしていた先輩もいた。極めつけは、一部のＯＢを除けば、ほとんど知る人もいないと思われる登山道の開設だろう。たしか、当時の白峰村から３０万円で請け負ったと聞いた覚えがあるその道の名は、ずばり「ワンゲル新道」。室堂から西北西に進み、湯の谷川を渡って、「湯の谷乗越」あたりで釈迦新道に接続する道だが、既存の青柳新道（白峰～青柳山～砂御前山～鳴谷山(＊)～シゲジ～湯の谷乗越）とともに、ほどなく廃道になってしまった。

一方、加賀禅定道や越前禅定道などが復活・整備され、白山の特長ともいえる快適な避難小屋の建て替えも進みつつある（甚之助、小桜平、殿ヶ池）。昔の山仲間と懐かしい白山を歩くのもよいのではないだろうか。

（＊）現在、百合谷から鳴谷山・砂御前山への登山道あり

表紙写真：栂 典雅（１９期）　表紙題字：中川 晃成（２３期）

今年の出来事から

北國新聞

巨大地震 死者千人超

三陸沖 国内最大M8.8

大津波、海岸に遺体多数

宮城で震度7

門前から金沢で震度3

各地の震度

未曾有の災害となった東日本大震災。やはり今年はこれに尽きると思います。原発事故も絡み、発生から９か月が経過した今でも傷跡は大きく残ったままです。改めて被害に遭われた方々にお見舞いを申し上げます。ＯＢ会の中にも、身内やお知り合いの方が被災された方もいらっしゃるでしょうし、人生が大きく変わった方もいらっしゃるかも知れません。また、義援金や物資の協力、ボランティアの参加などいろいろな形での支援や協力をされた方も多いと思います。そんな中 11 期 青柳さんが、ボランティアに参加された体験を「やまざと」に寄稿してくださいました（次頁から紹介）。復興には長い時間がかかるのかも知れませんが、今こそ皆で協力する「絆」が必要なのだと思います。

岩手大槌町
ボランティアツアー報告

11 期　青柳 健二

地震・台風そして豪雨。日本とは、自然の猛威とともに生きていく場所なのだろう。今年は特に、地球そのものが日本を基点に大暴れしている感があります。いや 46 億年を越える地球の歴史の中ではほんの些細な出来事であり、自然が暴れる日本は、だからこそ豊かな自然が残り、多彩な動物達が暮らすホットスポットなのでしょう。

3.11 東北地方太平洋沖大地震からすでに４ヵ月が経っていますが、震災ボランティアツアーに参加しましたので、その様子を、少し真面目に報告します。参加したボランティアツアーは、岩手県北観光が主催したバスツアーで、7 月 22 日夜東京発、23、24 日と岩手県大槌町でボランティア活動、25 日帰京という日程、宿泊は遠野市の遠野ふるさと村でした。（南部曲り家に宿泊）

ツアーの参加者は 40 人。男 20 人、女 20 人とピッタリ同数なのにはビックリ。女性が多いこと、若い人が多かったことには、その意識の高さと行動力に感心しました。若い夫婦参加者が３組、青年となった男の子をつれた中年夫婦が１組、さらに 13 歳の男の子をつれた親父さんもいました。九州のソフト会社が新入社員を４名派遣していました。二人連れ程度での参加が多かったようですが、私同様一人参加も結構いました。そして付言すれば、63 歳の私が最高齢でした。

作業は、津波で破壊された住宅のがれき整理でした。解体処理され重機で整地された後を、手作業でガラスや陶器片、家具や生活用品などの破片を集め、スコップで土嚢袋に入れていく、そんな作業でした。時間は 10 時～12 時、13 時～15 時の活動でした。40 人２班に分け、手分けしての作業で、作業自体はそれ程厳しいものではありませんでしたが、直射日光の当たる中で、使いなれないスコップを使うなど、チョット大変ではありましたね。おかげで持病の腰痛が悪化して、いまだに傷みを引きずっています。作業した場所が、あの大津波で甚大な被害を受けた大槌町の、正に被災地中心部である安渡地区であった事で、この津波の凄まじさを身近に感じることが出来たのが一番の収穫でした。港から 300m位の場所で、眼に入る範囲の全てが大津波によって破壊されていました。三陸鉄道山田線の鉄橋は、無残に破壊され、線路は何処かに流されていましたし、津波から街を守るために造られた高さ６m近い堤防も、軽々と乗り越えられ、寸断されていました。それらの悲惨極まる状況を、お昼の休憩時間に、この眼に焼き付けることができたのでした。

大槌町は、人口が１万５千人強の街ですが、市街地の半分が浸水し、人口の１割を超える 1,700 人弱が死亡・行方不明となるという破滅的被害を受けた町です。地震発生から４ヶ月が過ぎ、大津波に浚われた家や建物は、ガレキとして処理され、海辺に山となって集められていました。全てが土台だけ残して更地化された様は、営々と築いてきた人々の生活そのものが、見事なまでに、海の水によって洗い流されてしまったことを表していました。Ｍ９という大地震と、それが引き起こした千年に一度という大津波の凄まじい破壊力をこの眼で見て、人間の小ささ、無力さを実感させられました。

ボランティアツアーには、５回目の参加です、３回目ですという方々が何人もおられました。土日ということもあり、沢山のバスがボランティアを運び、多くの人々がボランティアに参加している様を見ることが出来ました。一人では小さな力であっても、多くの力が集れば、大きな力となって事を前に進めることが出来るということも、確認できたことでした。

宮古市に住み、仕事場が津波に流され、職を失い、今はボランティアツアーの添乗員として熱く働く若者が、バスの中で次のように訴えていました。

「被災地の現状を知って欲しい。意識を持って支援して欲しい。そして支援を継続し、支援の輪を広げて欲しい。そうすれば、希望を持って復興に向け、動いていく事ができるだろう。」

宿泊した遠野市は、大槌町の隣の釜石から１時間ほど内陸に入った山里です。柳田

國男の遠野物語で知られますが、百名山早池峰山の麓にあると言えば、山好きには通るかな。ここの遠野ふるさと村に泊まれるのが、今回のツアーの魅力でもありました。ここには、江戸末期から明治中期に建てられた曲り家が６棟保存されており、その２棟に男女分かれて泊まりました。ふるさと村は、文化と伝統を保存し体感できる施設として造られたものですが、敷地内には川が流れ、田や畑が作られ、実際に馬が住んでいる曲り家もありました。この種の施設としては大変良く出来ていて、「龍馬伝」などテレビ・映画の撮影にも数多く使われています。ハスの花が咲く池では、ホタルが輪舞するさまを久しぶりに観察することも出来たのでした。

ツアーでは、この施設のビジターセンター内にある食堂で食事をし、曲り家の囲炉裏端で酒を飲みながら語り会うなど、ある種ワンゲル的な盛り上がりのある楽しいものでした。ツアー参加３回目の、静岡から来た 62 歳のオッサンが仕切った夜の部では、全員がツアーに参加した動機や、現地を観て活動をしての感想を語り会い、時に涙する輩も出るなど、他のバスツアーでは味わえない体験もありました。また、最後の日には 80 歳になる地元の語り部が、曲り家の炉辺で「遠野昔話」を語ってくれました。方言で聞き取れないところもあったものの、「艶笑小話」みたいで愉快でしたね。

ボランティア初日の 23 日、13 時 34 分に宮城沖を震源にするＭ６クラスの地震がありました。休憩時間で休んでいる時でしたが、グアーという大地が唸るような音がした後、強い上下動がありました。津波もありうる、とのことで近くの墓地の斜面を登って高台に避難しました。少しして、「津波の心配はありません」との報を聴き、ホットしたものですが、チョット緊張しましたね。翌日の午前３時頃にも余震がありました。曲り家の中で寝ていたのですが、木の雨戸がギシギシと震えました。誰も起き上がって逃げ出す人はいませんでしたが、皆が布団の中で体を固くしていたようです。

ボランティアとしては、宅地のがれき整理をしたのですが、余震で作業を早めに切上げたこともあり、100 坪程度の場所ながら最後まで終えるには至りませんでした。９割程度は完了したということでしょうか？40 人でこの程度、正直、ボランティアに来て、役に立てたのだろうか？

今では、ボランティアに求められる役割は変わってきているのでしょう。浸水した民家の泥出しなど、生活を直に回復させる仕事は殆ど終わっています。ＧＷ初めに、同じ大槌町で活動した人は、「良くここまでガレキを整理したものだ」と感嘆していましたが、住めなくなった家は破壊し、ガレキとして集めるという部分までは、この大槌町ではほぼ終わっていると感じました。勿論、集められたガレキをコンクリート・金属・木など可燃物に仕分けし、本当に処理することまでは進んでいません。また、同じように壊滅的被害を受けた陸前高田市は、未だにガレキが散乱している部分が残っているとの事ではあります。大槌町に来たボランティアの別のグループは、ガレキで汚された大槌川を整理して、菜の花で黄色に染めようとの「菜の花プロジェクト＝河原の草刈」が活動であったとのことです。それは、希望に灯をともす活動ではありますが、生活を直に復旧させるためのボランティアとは違うものになっていましょう。

大津波に流された鉄橋の先から、生活の場の全てを破壊つくされた街の姿を俯瞰して、これをどう復興させたらいいのだろうか？と絶望的になったものですが、今こそ、行政や政治がその機能を発揮すべき時であると、心底思います。そして、その頼るべき行政や政治が、あまりに不安定である、この現実に、忸怩たる思いにいたるのが、本当に情けなく、寂しく思います。大槌町は、町長が津波にのまれ亡くなりました。来月の 8 月 28 日に、やっと町長選挙を行なうところまで漕ぎ着けました。この選挙が終わり、本当の復興へのスタートを切ることになるのでしょう。その時には、今の総理は退陣し、この復興を後押しする新しい体制が築かれているか、はたまた、政局がさらに拡大し破裂して、解散総選挙などという事態になっているのだろうか。前向きにボランティアに取り組み、汗を流す若い世代に、希望の芽を見ました。それとともに、我々団塊の世代など大人たちは、人々

を守るために一体何をしてきたのだろうか？

未曾有の大地震・大津波とは言え、一面これは人災であるとも言えます。大槌町では、高さ６mを越える大堤防を築きましたが、その堤防を過信してか、堤防の奥に多数の家が建てられ、そこに住む人達は、多くの人が逃げ遅れて亡くなったのでした。堤防は川に沿って「ハの字」に造られたため、津波はかえって勢いを増し、その堤防を易々と乗り越えた後は 10mを優に超え、鉄橋をもなぎ倒すまでに増幅して町の殆どを呑みこんだのでした。鉄橋の少し先にあった町役場では、津波が襲うその直前まで防災対策会議が行なわれており、屋上に避難できた一部の人を除いて、町長をはじめ多くの職員が津波に流されるという悲劇を生んだのでした。

三陸沿岸は、津波の常襲地帯であることは良く知られています。安政・明治・昭和と各時代に三陸大津波と言われる津波に襲われています。そして我々の知るチリ地震大津波は､わずか 50 年前の出来事でした。我々は、この歴史に何を学んできたのでしょうか？

今日は、埼玉県知事選挙でした。私も、すでに投票を済ませましたが、午後８時過ぎに開票が始まった、まさにその時、現職知事の当選確定が発表されたのでした。出口調査のなせる技。私の一票は実に軽く、殆ど結果に影響を残すことはありません。国政選挙も同じですね。３年前に中国の四川省で９万人の死者・行方不明者が出る大地震が発生していますが、被災した町を別の場所に丸ごと移すなどの復興作業は殆ど完了したと聞いています。民主主義が、優れた政治制度であるか疑問にも思えてしまいます。

ただ、先日の中国の高速鉄道事故を見ると、日本の方がまだましか？とも思いますし。でも、福島第一原発の現状を見ると、ヤッパリ今の日本はおかしい！とまた思いますね。

「当たり前に思っていて、毎日普通に過ごしていた生活が、一瞬にして破壊され、奪われるという事実にあい、こんなに恐ろしいことはなかった。」

「避難所となった学校の駐車場で家族と再会できた時は、心から、あぁ良かったと思った。」

「どうか、大切な人を大切にして、守ってやって下さい。」

今回のツアーの添乗員兼ボランティア隊長が、宮古市で被災した日のことを、涙ながらに熱く語った中での言葉です。ボランティアは、被災地に希望と元気を与える役割に変わってきていると思いますが、それを必要とする方々が、まだまだ一杯いるのです。今生かされていることを大切にして、自分に出来ることを、地道に誠実に行なっていく、そんな日々の積み重ねも大事にしていきたいものです。そして、地球は生きています。我々の住むこの場所で、未曾有の大地震がいつ起こっても不思議ではないのです。経験を活かし備えることも、また心掛けないといけないことなのです。

大槌町港町地区

山小屋酒場 2011

20 期　久富 象二

今年の山小屋酒場は、犀川ダムまでの林道の通行止めが８月までかかり、秋だけに行いました。ただし、秋も巨大ハチの巣に悪天候も重なり思ったような作業はできませんでした。そこで結果報告として、①７月に 20 期の深田氏と行った偵察の模様、②９月に現役がハチの巣を見つけた時の様子、③10 月に行った山小屋酒場の3つを、ショートストーリー的？に最近のベルクハイムの状況報告も兼ねて紹介したいと思います。

①　７月の偵察（記：20 期　深田）

まだ、林道の通行止めが続いており、寺津発電所から往復 20ｋｍ以上の歩行です。蒸し暑い日が続いているので体力が持つか心配でしたが、幸い涼しい日で日差しも午前中だけでした。

とても久しぶりの犀奥なので、どのくらい変わったか道中が楽しみでしたが、自分の記憶とほとんど変わっておらず、とてもなつかしく思いました。変化点を上げるとすれば

・桂さんの遭難地点の石積みが見当たらない。
・高桑さんの慰霊碑手前の斜面が崩壊して押し出している（最近のもの）
・つり橋手前のガレ場が草木に覆われてしまった。（結構歩きづらい）
・水位観測所上流の斜面が出水でえぐられ、崩壊部分のすぐ上に巻き道がつけられている。（結構ヤバイ）

の４点ぐらいです。

ベルクハイムの戸をあけると、室内の床一面に敷き詰めたようにカメムシの死骸が溜まっていました。中へ入ろうとした時に、壁ぎわの紙がカサカサと音を立てたかと思うと、紙の下から太さ４，５センチ、長さ１．２ｍ以上と思われる大ヘビが現れ、コンクリートの壁と木の壁の隙間から逃げていきました。犀奥は人間にとって決して快適な場所ではないけれども、その分圧倒的に人を寄せ付けない自然が残っていることをつくづく感じました。３箇所の窓を開け放ってかび臭い空気を入れ替え、カメムシを一掃して昼食、白山・ベルクハイムの記念の赤布を見回すと、２次から９次までのうちなぜか４次（18～21 期）の布だけがボロボロになって垂れ下がっていました。

帰路、高桑さんの碑の周りが草ぼうぼうだったけど、カマを持参していなかったので、手だけ合わせて帰ってきました。

②　９月に現役がハチの巣を見つけました（記：現役３年の渥美 君）

９月 28 日に偵察に行ってきました。

まず、犀川ダムからベルクハイムまでの道ですが、ところどころ崩落している場所があり、一応通れましたが、備え付けのロープに頼らないといけないなど、やや危険でした。また、もう少しで道が崩れるのではないかと思われる個所もありました。雑草等、草で道が塞がれているようなことはありませんでした。

次に高三郎山ですが、取り付きから延々と藪こぎでした。かなり急登だったためコースタイムの２倍の時間がかかり、日暮れまでに帰ってこれそうになかったので途中で引き返しました。藪のため登山道とそうでないところの見分けが困難で、下る際に遭難しかけました。一応赤テープはありましたがかなり危険だと思われます。２日間で整備するのはかなり困難だと思われます。

最後にベルクハイムですが、山小屋の周りもかなり草が生い茂っていました。極めつけは、山小屋の中に巨大なハチの巣があったことです。これは素人の手には負えない大きさです。これをどうにかしないと、小屋に泊まることは不可能だと思います。

③　10 月の山小屋酒場　～ハチの巣退治～
（記：20 期　久富）

10 月 22 日（土）日帰りでベルクハイムへ行ってきました。現役諸君は犀川ダムまで同行しましたが、悪天を考慮して中止を決定し引き上げて行きました。雨の中、我々ＯＢ５名は予定どおりベルクハイムへと向かいました。

山小屋に着くと、合津さんはしばらく観察した後、ハチの巣をカマでバッサリと切り落とし、ビニール袋につめました。悩みの種だったハチの巣は、合津さんの手にかかりいとも簡単に駆除されました。

ハチが侵入した壁板を張替え、小屋の周辺の草刈りをし、雨量計付近の高巻き道を整備し（疲れてきたので途中で切り上げ）、15 時にダムで解散しました。

倉谷は林道の崩壊が進み、年々入りにくくなってきています。ダムまでの県道の通行も楽観できません。こまめに状況を把握して、来年春の山小屋酒場に備えたいと思います。

ハチの巣の件で多くの方からアドバイスをいただきました。当日は吉田穂積さんに現役をダムまで車で送っていただきました。また、鳥越君には 15 時に現役を迎えにきてもらうことになっていました。お忙しい中都合をつけていただきありがとうございました。

今回は当初の予定どおりとはいきませんでしたが、写真のように大きなハチの巣を駆除できたので善しとしたいと思います。

ＯＢ参加者：合津（ 6 期）、佐野（15 期）、
北川（16 期）、深田（20 期）、
久富（20 期）

ＯＢ南竜集中ＰＷ 2011

８期　山村 嘉一

3回目のKUWVOB南竜PWを 7 月 27 日(水)～29 日(金)に行う事が出来ました。
参加メンバーは特筆すべき田村御大以下、総勢 13 名でした。(参加者の年齢を平均するとおおよそ 66～67 歳でしょうか？)
田村昭夫(0 期)、吉村弘二(7 期)、穴田昭一(8 期)、伊豫欣二(8 期)、藤井信晴(8 期)、山村嘉一(8 期)、谷道正晴(9 期)、鍋島武(9 期)、保田敦(9 期)、山中重夫(9 期)、吉田幸造(9 期)、山西久美子(13 期)、山西潤一(ご主人)

鳥越さんからの依頼により、雨の３日間の行動（沈澱？）記録のようなものを、ごく簡単に、それも鍋島さんの記録や保田さんのＤＶＤを頼りに書かせて頂きます。

<7 月 27 日>

鈍足をスタート時間でカバーしたく、山村は午前４時前に自宅を出発し、藤井さん、鍋島さん、吉村さんをピックアップして、６時半には別当出合から登り始めました。山村の歩調は皆さんにとってはゆっくり過ぎたのでしょうが、『ちょうど良いよ』との優しいお言葉に安心しながら、10 時半過ぎに南竜セントラルロッジに到着。早速例によってビールで乾杯!! その後、雨がだんだん本降りになる中、参加メンバーが次々と元気に到着。中でも谷道さんは遥々チブリ尾根から別山を踏んでの合流でした。

まだ雨が降っていない中飯場(7:15)

<7 月 28 日>

雨！雨！の中、鍋島さんは自分が下りれば晴れるでしょうと、単独下山。(残念ながら彼の犠牲的精神は天に通じませんでした。)

一方、この日に合流する山西夫妻が心配。おそらく断念しているかもしれないと思うも、携帯の電波が届かず、連絡の取りようがない。とにかく沈澱しているしかないと、田村御大を中心に話に花が咲き、退屈しませんでした。そろそろ今日の宿泊手続きとビールの買い出しにと、センターロッジに向かう途中で、篠突く雨の中をしっかりした様子で登ってくる二人連れに出会い、『もしかして山西さんですか？』の問いに『はい、そうです』の答え!! 聞くところ、山西さんの御主人はかなり山をやっておられ、かつ晴男との由。『今回はよほど強烈な雨男がいるのだね』とのことでした。

28 日夕食前の全員集合(17:05)

<7 月 29 日>

昨日の夕食後、かすかな陽射しがあり、天候回復が期待されましたが、残念ながら今日も雨。6:00 には山荘で朝食を取り、7:00 には南竜を後にしました。

雨と霧の中を下る一行 別当覗(9:00)

東京方面へ帰る藤井、山中さんが先行し、本隊は 11:00 頃に別当出合に下山しました。白峰温泉の総湯のオープン時刻（平日 12:00）にぴったり合わせたように、ゆったりと湯に浸かり、昼食をとって解散いたしました。

大変雑駁な報告で申し訳ありませんでした。なお、2012 年は性懲りもなく７月 25 日～27 日で行う予定です。是非ご参加を!!

野沢スキーは最高に愉快だ!!（2011 スキー合宿総括）

11 期　青柳 健二

今冬は、昨夏の記録的猛暑の反動で、北陸地方などの雪国は久しぶりに大雪に見舞われました。野沢温泉もタップリと雪に覆われ、ゲレンデ上部のやまざとゲレンデは３ｍを超える積雪で、絶好のコンディションでスキー合宿を迎えることとなりました。この為か、今回のスキー合宿は参加申し込み期限の２月６日時点で、参加者が 20 名に達しました。合宿直前に１名のキャンセルがあり、最終的には 19 名となりましたが、それでもこれは長き合宿史上の最多記録更新です。参加表明をした後に、諸般の事情により不参加となった方が３名いらっしゃいますから、来年以降は 20 人台での合宿となりましょう。また、嬉しいのは、金曜日の宿泊者が 11 名、ゆっくり野沢を楽しむ人が増えてきました。２泊３日がお勧めと言っている幹事として、宿の女将ともども、良い傾向だと思っています。

定宿である「リゾートハウスふるさと」も進歩しています。まず、内湯が温泉となりました。野沢温泉の原泉とは異なるようですが、湯は滑らかで疲れが一層癒されます。そして、宿泊客の半数がオーストラリアからのスキー客という国際化。夏の南半球から、野沢の雪と温泉を楽しみに来ているのですね。家族かカップルで、一週間単位で異国の雪世界をユックリ楽しんでいるようです。中尾の湯でも、愉快にお湯に浸かっていました。夕食は外食としているため、夜に一緒に楽しむ機会はなかったのですが、将来は、我らの夜の宴に招待して、国際交流を図ると面白いでしょう。

さて、スキーは 19・20 日と晴天のスキー日和の中で快適な滑走を楽しむことができました。ただし、これは 18 日の視界 10m弱という荒天の中でのスキーがもたらした結果であることを認識しておくべきです。降雪の翌日のパウダー。何事も、苦あっての快楽なのです。特に 19 日は、野沢のゲレンデ上部に茂るブナとダケカンバの林が真っ白な樹氷（霧氷）に覆われ、まさしく白銀の世界の中で滑る快感を味わいました。この景色は日本独特のもので、森林限界を超えたところがゲレンデとなるヨーロッパアルプスでは観られないものです。細い枝に白い雪が付着した森が織り成す雪景色は、まさに日本の冬の美の頂点を観るがごとくです。この 10 数年、２月の野沢に通っていますが、その中でもナンバー１と言える程の絶景でした。

19 日の昼食後は、その絶景の中で、久しぶりに全員でビデオ撮影会を楽しみました。カメラマンは保田さんと小山さん。湯の峰ゲレンデのリフト横、上と下に二人が陣取り、各人が思い思いにシュプールを描くのを撮っていきます。お二人は、この日の為に白馬 47 で撮影の練習をしたとのことですから、かの加藤さんに負けず素敵な映像が撮れているでしょう。白く輝く木々と青空の下でのスキー、モデルとなるスキーヤーの体型と滑りには不安なしとは言えませんが。この時の映像は、保田さんが、皆さんのデジカメ映像とともに編集してＤＶＤ化してくれることになっています。どんなＤＶＤとなるか楽しみです。保田さん、どうぞ宜しくお願いいたします。皆さんも、保田さんの呼びかけに答え、デジカメ映像の提供をお願いします。

スキーは、参加者が多いこともあり、ビデオ撮影時を除いて集団滑降方式とはせず、各人が技能と体力に合わせてグループを組むか個人で自由に滑っていただきました。雪の状態が良い時には、専らスカイラインコースを滑る人、土日でもマイゲレンデの様な湯の峰／水無ゲレンデで滑る人、警告・自己責任の標識が出ているやまざとゲレンデのリフト下を滑り悦にいっている人、一眼デジカメを持ち出し、白銀の絶景を必死にカメラに収めようとする人など、それぞれが野沢の雪と思うままに遊んだのでした。さぞ「感動を掴み取った」でしょう。

もう一つの合宿の楽しみ「野沢の宴」は、例年どおりＡＳＡＧＩＲＩ（部屋名はローマ字表示あり）で行いました。まず若手の代表松下さんが、「ツールド能登 400ｋｍ参戦記」を報告、そして初参加の吉野さんが、カナダ・ウィスラースキーとヨーロッパ（スイス･オーストリア･イギリス）ハイキングの報告を、さらに佐藤さんの「名古屋－金沢さくら道 270ｋｍウルトラマラソン」と「白山神駈道登山（美濃禅定道－加賀禅定道走破）」の報告をされました。

プロジェクターで映像を写しながらの名演で、時に入るＯＢ連との質疑応答も楽しく、元気と勇気と愛を与えられたのでした。

松下さんは、日本と世界の半島を制覇する夢を語りました。吉野さんの写真には必ず奥様が写っており、スキーやハイキングとともに愛を育てていた様を知りました。そして、佐藤さんの古希を前にされての快挙には、「継続は力なり」「夢は実現できる」と教えられたのでした。

最後は、今年年女となる舟田さんが、百名山完登達成時の加賀友禅染の垂れ幕を披露し、前週に行なった「ビオレドール（黄金のピッケル）賞を受賞した登山家谷口けい講演会」の様子を語り、「自分自身の限界への挑戦が永遠のテーマ」という彼女自身にも重なる心意気を語ってくれました。まさに「夢は実現させるもの」なのです。

舟田さん良かったね。時は経ち、宴は田村さんが音頭をとる「南下軍の歌」の合唱で閉じたのでした。

宴の中では、田村さんと松下さんによるサイエンス討論「リーマン予想」が行なわれ、車座でお酒を飲めば、野村さんの「ガン研究への道程」、Ｙ野村さんの「郡是（グンゼ）での体験と地域文化論」などが聞ける、野沢のスキー合宿は、脳細胞を刺激する楽しい場であることを再発見しました。こんな愉快な語らいが出来る幸せを、タップリ味わった夜なのでした。

今年も楽しいスキー合宿でした。長野冬季オリンピックが行なわれた 1998 年３月に、創部 40 年のプレ行事として始まったこの合宿は、13 年の年を経て、今回が第 14 回となっています。良く続いてきました。今年は 19 名の方が参加されました。幹事として嬉しいのは、リピート率の高さです。合宿に参加して、楽しかったと、また次の年も参加する。今年は、東京から四国に戻った高田さんが、四国から飛行機と新幹線を乗り継ぎ参加されました。すこし休んでいた小山さんも復活して参加され、ビデオ撮影に活躍されました本当に嬉しいことです。そして、少しずつですが、参加者の輪も広がってきています。今年は、10 期の吉野さんが初参加。参加表明をしながら、都合により不参加となった９期吉田さん、21 期石田さんも初参加組でした。お二人は、来年はきっと参加されましょうから、また楽しさが広がりますね。

今年は、北陸の人達は雪かきで大変でしたでしょうが、お陰様で質・量とも最高の状態でスキーを楽しむことが出来ました。そして、本物の温泉と美味しい料理、お酒と抹茶などを味わいながらの愉快な歓談。毎年こんな素敵な時を持てるのは、本当に贅沢なことです。

参加した方々全員の名前を記してお礼を申しあげるのは控えさせていただきますが、今年も皆様から温かいご支援とご協力をたまわりました。どうも有難うございました。

では、また来シーズンも、野沢で会いましょう！　雪と遊ぼう！　感動を掴み取れ!

近畿支部活動報告

毎年近畿支部は、ＰＷやサンマパーティーなど活発に活動を続けています。近畿支部のＨＰから引用させてもらって、ＰＷを中心にその活動の一部をやまざとで紹介させていただきます。
（注：以下の内容は、ＯＢ会事務局が近畿支部のＨＰから平成 22 年 11 月～平成 23 年 10 月までの活動について抜粋をしたものです）

１．粟鹿山ＰＷ

開催日　H22.11.13
参加者　16 名
コース　粟鹿神社＝自然学校登山口～展望台（昼食）～粟鹿山～展望台～登山口＝よふど温泉

西宮市の小学校が自然学校で使っている道、急であったがしっかりした歩きやすい道であった。杉林が多いが、途中にいのしし柵、堰堤、林道などがあり登っていても気分がまぎれる道でもある。

展望台からの稜線は、NTT の巡視道路を歩くことになるが、横列でしゃべりながら歩くには便利な道だった。

２．甲山イブイブＰＷ

開催日　H22.12.23
参加者　17 名
コース　阪急夙川駅＝柏堂町（北山植物公園）～展望岩～北山貯水池～甲山麓（昼食のち解散）

今回は、忘年会を兼ねての山行き、体脂肪収支は大幅増になったはず。昼食は 4 時間かけてしまった。

また、植物園～北山貯水池の道はやや遠回りであったが、稜線を歩いた。風化花崗岩の大岩がある明るい道でなかなか好評であった。行き先の割りには、大きなザック、しかも目的地の前後は歩いたので気持ちだけは本格的登山、それが爽快だった。

12 月の企画はＩ豫さん。昨年はダイヤモンドダストが煌めく中での山鍋、今年もそれをやろうというのだ。ただし、寒かった反省に基づき山鍋に適する場所を探す。少し歩けて、帰りは千鳥足でも大丈夫な場所。しかも環境重視。寒くても風がこない条件で…。ところが、探せばあるものだ。屋根つき、水道はもちろん、バス・トイレ付である。バスといっても風呂ではない。本物のバスなのだ。これなら最悪でも帰るには困らない。

集合は、阪急夙川駅 10 時。10 時にならないのに 10：10 発のバスがもう来ていた。大きな荷物があるので、とにかくバスに乗り込む。そうしているうちにバス内で全員が集合した模様。17 名もいるので一応確認する。いつもの集金係りの Ce 子さんが手際よく集金開始だ。バス代 210 円は各自払いだ。その大きな荷物の我々は標高 170mの柏堂町で下車、そこが今日の出発点・北山緑化植物園なのだ。

山での鍋はうまいがややこしい面もある。長時間の火器となると背の高い山用のコンロでは不安定。そこで家庭用コンロを使うことにした。17 人だから 4 台あればゆったりと食えるだろう。ただし、ザックへのパッキングが難しい。野菜も嵩張るし圧縮はご法度だ。だいたい贅沢には非合理性が付きまとう。金の問題ではない。そこに山生活の楽しさがある。学生時代に北アルプスへ持っていった塩さば、運ぶのに困るが、山では超贅沢な食い物だった。だから、今日はみんな大きなザックを持ってきている。F 井さんなんかは 70L のザックである。一応、個々にあわせボッカレベルを決めておいた。「５kg 超級」「５kg 以下級」「お玉超級」。以下というのは安心だが、超というのは上限がないということだ。地上に置かれた荷物を各自の判断で適当に取っていった。多分不公平があるのだろうが、納得の範囲である。ま、善しとすべきだろう。

登山？開始。今日の山行きの目的地との標高差は約 50m。だから、みんな感覚的には舐めている。手入れされた公園から猪柵の外に

出た。いきなり先頭を歩いていたＩ豫さんが最初の池で道を間違えていた。少々間違えても大きな支障はない。次いで急な登りとなった。防寒具で身を包んでいた人は早速汗をかいてしまった。最初にいきなり 40mの高さを稼ぐのだ。穏やかな天気だけに厚着は禁物である。登りきったところが展望岩。今日はゆっくりでいいのでもう大休憩。標高 200mそこそこなのにすこぶる展望がよい。さすがに断層の崖の上という感じである。穏やかな天気、ヤッケを着ているぐらいがちょうど良い。大きな岩がゴロゴロしているので、大いに遊べる。まるで北アルプスにいる気分だ。

貯水池まで来ると、今度は会場が心配になってきた。レンガ敷きに御亭、広々とした前庭、池まである広々とした空間。使用料が無料であるだけに先客が入るのを恐れた。ここには水道、水洗トイレ、それにバス停までもが完備された理想の場所なのだ。これまで、こんな冬空に外で宴会をするのはよっぽど変な連中だと高をくくっていたのだが、今日の穏やかな天気、凡人である我々が行くのだから、他にそのような人がいてもおかしくない。貯水池でのトイレ休憩をしている人をよそに、先発のＩ豫さんは場所確保のため対岸に向けて急いだ。

やはり、我々は凡人ではなかったようだ。さりとて変人でもない。目的の場所は貸切状態だ。 住み心地が良いように幔幕を張る。戦国武将はよく考えたものだ。わずかな風でも長く居ると冷える。ザックから幔幕用のブルーシートが取り出され、御亭の柱に取り付けた。風も弱く向きがいいので前方は開放でもよさそうだ。思い込んでいたよりも柱間の距離が短く、シートが余ってしまった。もって来てくれた人には申しわけないことをした。幔幕を張るとすごく居心地がよい。さりとて適度の高さなので開放感もある。市中だったら通報され即警官がやってくるだろうに。

宴会開始の掛け声もなく、もう金井さん差し入れの穴子を焼いているではないか。K 岩さんの奥さん手作りのシメサバもある。鍋が始まる前の試食とはいえ全員が試食している。穴子もシメサバも酒のアテに最適な逸品。鍋をそっちのけで乾杯することになった。女性はサンタ風のエプロンを纏っている。6 人もいれば、すごく華やかだ。知らない人が見れば介護施設の介護人のようにも見える。

いよいよ本番の鍋が始まった。

「こちらは西宮消防署です。ハイカーのみなさん、山火事に気をつけましょう…」、「ここで火を使うことは禁止されています…」下見の時、広報車がスピーカでよくがなっていた。「ここでの焚き火は良くないよね～」我々も頷いたものだ。

この寒空だからか、幸いそんな音声は全く流れてこなかった。都会の公園でホームレス達がするのとほぼ同様の形式で 4 つの鍋を取り囲んだ。まあまあのゆったり空間である。

食っても食っても素材は尽きない。豆乳鍋、鳥味噌鍋、水炊き鍋２、好きな場所に移動し、食うほどに飲むほどに時間が知らない間に過ぎていった。白菜、菊菜、各種の魚、きのこ類、水菜、豚ロース、これだけ食えば満腹。満足＆満足。最後にうどん。「稲庭うどんはやはりうまいね」細くて歯ごたえがあり、お代わりをした人もいた。F 井さん差し入れのリンゴのデザートもあった。信州まで車を飛ばして仕入れてきたという念入りのリンゴだった。みなさんやることがすごい。酒も、「ビール」「奥能登の大慶」「西条の賀茂鶴」「明石の空の鶴」「サントリー山崎」「河童という名の焼酎」「サントリーハイボール」「赤ワイン」「何かの果実酒の年季もの」「H22 年度 15 期会ラベル添付の特製能登ワイン」ラベルは U 馬さん制作のもの。飲兵衛の M 宅さんが呑みたいのをこらえて、このＰＷに持参してくれたらしい。

まだまだあるぞ。今回は羊羹も豪華だ。U 野さんが信州まで「小布施の栗鹿の子羊羹」を買い求めてきた。そのついでに仕事もしてきたという。M 代さんは、「虎屋の羊羹：夜の梅」を買うために京都に引っ越ししたそうである。それが偶然にも M 所さんの勤務地に近かったとか…。やはり 15 期の連中は根性が違う。

こんな羊羹だからこそ、やはり大中小で食わねばならない。「満腹の人は棄権でもいいですよ」とのことだったが、誰も棄権する人はいなかった。この会を象徴しているように思えた。元来ならば、抹茶でいただきたいところであったが、T 村さんが急遽参加できなくなり、ドリップ・コーヒーでいただくことになった。後片付けはテキパキ、ゴミは全て良

識のある人のザックに収められた。

ちょうど来たバスにＡ山夫妻、Ｍ代さん、Ｍ宅さんが乗った。残りは来た道をショート・カットで戻った。往きは山道を少し歩き異空間（あれはサンタの国だったか…）に辿り着いた。そこで山鍋を楽しみ、帰りは山道を歩き現実空間に戻る。今回の山行きはそんな意味で二つの空間をワープした理想的な山行きだった。たとえ、異空間で走っていたバスが偶然に現実空間に入ってきても、異空間から現実空間にワープするバス代が 210 円で、現実空間だけのバス代も 210 円だったとしても、換言すれば、歩くことでバス代が安くならなくても、それは全く気にすることではない。金を超越し、豊かな思い出が残るならば、その非合理性は最高の贅沢と呼ばれるものであるはずだから…。

３．虚空蔵山ＰＷ

開催日　H23.1.22
参加者　17 名
コース　ＪＲ藍本～酒滴神社～表参道～虚空蔵堂～尾根分岐～虚空蔵山（596ｍ）～分岐～最低鞍部～陶の郷

長らくの冬型の天気図のあと、雪&氷を考え念のため簡易アイゼンを持参したが、当日の穏やかな天気のため使うこともなく快適な山行きを楽しめた。

登山道も良く整備されており、虚空蔵山の展望も素晴らしい。

４．中山連山ＰＷ

開催日　H23.2.26
参加者　13 名
コース　ＪＲ中山寺～阪急中山～中山寺～中山梅林～（足洗川道）～天空塚～頂上展望所～中山最高峰～（稜線道）～中山寺奥の院～大林寺～阪急清荒神

天気も良く、梅林も開花期に入り、多くの登山者が予想されたが、登りは足洗川の道だったので、人も少なく比較的静かな山行きとなった。13 名の大所帯、天空塚のあたりから登山客があちこちで弁当を広げているので昼食も心配したが、頂上展望所は貸切状態であった。

そこでの昼食は、まさに富山のご馳走が並べられた感がある、贅沢な一日となった。大中小も、蒲鉾、昆布巻き、京観世、福砂屋のカステラとなかなか繁盛していた。

道も食事も平凡そうに見えてなかなか変化のある山行きでもあった。

５．大岩岳ＰＷ

開催日　H23.3.26
参加者　8 名
コース　JR 道場～千刈ダム～大岩岳～東大岩岳～丸山湿原入口～西谷森の公園～境野＝JR 武田尾

迷いやすい山、しかも松茸シーズンには入山禁止となる山域を歩いた。ここの山域は断層による砂礫の風化が激しいのか、あちこちに砂山が見られた。そこでは、松の低木が生えているために展望がよく休憩適地が点在する。

下山は、東大岩岳からの稜線道を使ったが、道の整備状況はあまりよくなかったが、展望もよく変化に富んだ快適な道であった。下山後の境野バス停までの道も懐かしさを感ずる里山風景に満ちていた。

６．蓬莱山ＰＷ

開催日　H23.5.14
参加者　15 名
コース　（往）JR 志賀＝びわ湖バレイ・山麓駅++山頂駅（打見山）～笹平～蓬莱山～小女郎ヶ池
（復）機動隊：小女郎ヶ池～蓬莱山～笹平～山頂駅++山麓駅（使える交通機関はすべて使う集団）
足軽隊：小女郎ヶ池～蓬莱山～金毘羅峠～山麓駅（道だと判断すればとことん歩く集団）

今年度の最高峰（1174.2m）の山、しかし、登りはいろいろあって選択制になっていた

が、その約 800mの登りは全員ロープウェイで行くことになった。山麓駅が標高約 300mだから、実質登っていないように見える。が、打見山から一旦笹平に下り、蓬莱山に登り、そこから、小女郎峠を経て小女郎ヶ池に至るので、多少上下動はしたことになる。下りは、足軽隊が標高約 800mを駈け下りた。
打見山～蓬莱山はスキーゲレンデであるが、蓬莱山から南はアルプスのプロムナードコー
スを感じさせる展望のよい高原歩きであった。

序章（集まり）

このＰＷは、実に天候に恵まれた一日。パーティーも離合・集散しながらも決め所ではバッチリと集合するなど、見事なまでの山行きでした。乗ってくるはずの新快速に、はたまた堅田で湖西線に乗りかえるも仲間はあまり見えず少々心配したが、集合地・志賀駅にはバッチリ全員が揃う見事さ、これは後の見事な曲を想起させるものだった。近くの人は早めに駅に来ていたらしい。ここでの特記は、湖西線の座席に魚が乗っていたこと、元、湖人のＵ野さんの解説では「ニゴロ鮒」ではないかとぞ。

第一楽章（ゴンドラ）

バリエーションを認めながらも先ずは全員がゴンドラに乗る。そして全員が揃って小女郎ヶ池まで行くことになった。今回の全曲を流れた隠れた動機でもあった。

第二楽章（山頂での憩い）

今日の運だめし。こんな快晴に運だめしもないだろうが、クジによって当たる鈴の大きさが違うというわけだ。初参加の高田さんと荷物の重い伊豫さんが大当たり。鈴が大きいと音が大きいと思われるだろうが、そのようなことはない。小さな鈴が綺麗な可愛い音を鳴らしていた。

打見山～蓬莱山はスキーゲレンデである。五月晴れに心地良い風が吹く。木々がないのですこぶる展望が良い。眼下に琵琶湖が大きい。道は芝地で緩そうに見えるが一汗かく。蓬莱山からの眺めはまさに 360°。一等三角点の威厳どおりである。Ｉ豫さんがあちこちの山地図を出して、山を説明する。ここは彼にとって庭のような山なのだ。バリエーションルートのリフト隊がクリンソウ観察を終えて登ってきた。そのとき携帯が鳴った。Ｓ林さんがすぐそこまで来ている。しかも早いテンポでやってくる。なんと蓬莱山頂で携帯が通じるという幸運にも恵まれたからだ。ならば、小女郎ヶ池でちょうど会うためには先にここを出ねば…。

第三楽章（展望の中を歩く）

蓬莱山からの下り道は、おお、なんとサウンド・オヴ・ミュージックの世界ではないか。眼下に琵琶湖、遠く京都の街を眺め草原・小潅木の中を下る。そのような、ゆったりとした多種の楽器が奏でる中、タタタと速いテンポのスケルツォ Ｓ 林さんの足音が入り込む。そして、ついに小女郎峠で合流。その感動のまま。小女郎ヶ池になだれ込んだ。

第四楽章（峠の風）

小女郎ヶ池は今日の目的地、ここを食事＆お茶会会場と決めた。峠では風が吹いていたが、ここは風もなく暖かだ。平地に簡易テントを張り、シートを敷き詰めた。Ｉ豫さんが手早くスープを作る。空腹の胃袋においしさが広がる。果物が回ってきた。プチトマト、プチプチトマト、ネーブル、グレープフルーツ、大阪のどこかで取れたみかん。新鮮な味がした。

第五楽章（還暦）

世の中めでたい人が居る、還暦だという。そのめでたいＭ所さんが宴会でもらったという赤い頭巾とチャンチャンコを持ってきた。そこで、曰くありげなこの伝説の地で記念撮影ということになった。ならば、Ｋ岩さんも古稀なはず。メデタイ!! かくして、この風景一杯をめでたい人が埋め尽くすべく、つなぎ写真で撮ることにした。

お茶会の菓子、枚方のどら焼きとカキヤマは全員に配られた。さらに、とら屋の羊羹で大中小を実施。結果は、次のとおりの偏りのあるものであった。切り分けた最終の「小」の分配量は長さ2cm巾５mmぐらいの、小さくともそれは羊羹と呼ばれる代物であった。結果は、大：７人、中：３人、小：５人。続いての福砂屋のカステラの結果は、大：10人、中：４人、小：１人！

全体の 1/5 を食べるものがいる一方で、1/20しか食べられないもの…。羊羹以上の格差があった。歎くなかれ。世の中は不条理にみち満ちているのだ。

K 井さんの京土産・黒蜜、和三盆、メープルシロップのラスクもうまかった。Ck子宗匠の一応の指揮下、山鹿流の作法にのっとって？、Ce子、M代、S美各宗匠が点てた茶は、絶品でおかわりが相次いだ。今回は茶碗も５個が準備され、ゆったりとした気分で茶会が進んだ。おいしかったのは茶によるとこが大きい。茶は、S 子さんが買い求めた宇治茶の生産地・南山城村の茶であった。この風景、場所は伝説のある小女郎ヶ池、茶を喫する好条件が揃っているのだ。茶碗も、お茶の先生からいただいたもの、おばあさま手作りのもの、古典に出てくる玉水の里で買い求めたもの、息子の嫁が母上様に買ったという記念のもの、山岳茶のために特に選んだもの、そのいわれがまた楽しく、笑いが絶えなかった。

第六楽章（コーヒータイム）

コーヒー好きな人のため、上等とはいえないがドリップコーヒーもあった。蓬莱山からわずか30分の距離の別天地、小女郎ヶ池。ここは登山道のほぼ十字路にあたる。よってたくさんの人が通り過ぎて行く。テントが壁になって我々不埒な連中の仕草を隠すのに役たってくれた。

そうこうしているうちに、ここに2時間以上も遊んでいたことになる。そろそろ小女郎ヶ池にお暇する時刻だ。テントをたたみ別れを告げた。

第七楽章（石佛の道）

小女郎峠へはすぐであった。蓬莱山も間近に見えている。ゆっくりゆっくり登る。この道には石仏が多い。しかし、お地蔵様ではなく別の仏様のようだ。それを求めて、窟屋へも寄ってみた。後背に火を持っているからお不動さんのようだ。ここは修験道の道？、行きはサウンド・オヴ・ミュージックでも、帰りはやはり日本の山だ。

第八楽章（再び蓬莱山へ）

蓬莱山の登りで、パーティーを2つに分けることにした。ゴンドラ隊と足軽隊である。足軽隊は片道 1000 円のゴンドラ運賃を浮かす作戦である。高度差800mと1000円という比較できない単位換算には複雑な数式が背景にあるのだろう。一方、ゴンドラ隊は、最初から割り切って JAF 割引を利用し、往復1300円の切符をゲットしている。よって、彼らの行為は 800mの下山労働が 300 円であることを知り抜いている。1 時間半で歩けば時給 200 円の労働ということなる。山登りというのは、金では換算できない価値があることを物語っている。足軽隊は、やはり足が軽い。すぐに蓬莱山頂に辿り着き、我々に手を振って下山していった。

第九楽章（水仙の咲く丘）

蓬莱山でさらに、リフト隊と散策隊に分かれた。リフト隊はリフトの１日券（1000円）を購入したため、券を使う義務があるようだ。来るときは打見山から笹平まで歩いたので、まだ300円しか使っていない。これは、主婦の感覚からは絶対に許せない状態だ。リフトで下山するとトイレに早く到着できるという利点もあるようだ。散策隊にもトイレに行きたい人はいる。しかし、標高 100m下りで300 円を払ってリフトに乗るというのは主婦の感覚から許せないのだ。

最後の丘を越えたときに、思わず息を呑んでしまった。馬鹿にしていた水仙畑がすごいのだ。しかも逆光の中に輝く水仙は、ソフィア・ローレン主演の「ひまわり」を感じてしまった。多分、主婦感覚はどこかに飛び去り、世の中の矛盾を受け入れさせる美がそこにあった。リフト隊も、もう一度リフトで蓬莱山に登り水仙畑を見に行った。賢い主婦二人であるが、もちろん、下りはリフトを利用せず、ゆっくりと水仙を愛でるためにである。

第十楽章（笹平にて）

水仙の見える笹平で長く休憩をした。Ｉ豫さんが早速コーヒーを入れてくれた。素晴らしい場所だ。ここの休憩所では無料で紙コップも使えるようになっている。トイレを使い、紙コップをいただいては申しわけないと思ったが、1 日使えるリフト券を 2 人も購入しているので、まあ、許してもらえるだろう。だって、リフトに乗っている人はほとんどいない状況だから、二人の貢献度はすごく高い。足軽組の下山を調整すべく、ゆったりとした時間を楽しんだ。

最終楽章 1 番（下山）

16 時発のゴンドラに乗って下山した。途中で足軽組から下山したとの連絡が入った。何と言うタイミングの良さ。ゴンドラを降りると足軽組が迎えてくれた。ゴンドラ組と足軽組との心がここで一つになった。啐啄（そったく）同時とはこのようなことを言うのだろう。今日歩いた稜線がはるか上方に見える。記念写真を撮った。初参加の S 子さんを乗せたＩ豫号とは山麓駅でお別れだ。

最終楽章 2 番（思い出ができた）

残りは、さらに 320 円のバス代を浮かすべく志賀駅に向った。下るのみだから足軽組 2 の気分である。途中、樹下神社に立ち寄り無事志賀駅に到着した。今日の歩数は、23560 歩と 14227 歩。同じ山行きなのに、その違いは、300 円分の下山の歩きらしい。M 所さんに、この 300 円とバス代 320 円で計 620 円分、おいしいビールが飲めますねといっていたら、飲兵衛の執念だろうか、どこかで 50 円を拾ったとのこと、「620 円でなく 670 円です」との修正の報告があった。15 期の飲兵衛連は山科にて深夜まで飲んだとのこと、670 円ですまなかった筈、それは今でも謎である。しかし、参加者それぞれが楽しい一日であったことは間違いなさそうである。

７．愛宕山ＰＷ

（H23.5.25　悪天候のため中止）

８．百丈岩ＰＷ

開催日　H23.6.12
参加者　7 名
コース　JR 道場～あけぼの茶屋～百丈岩～静ヶ池～（稜線道）～名塩無線中継所下～赤坂峠

あけぼの茶屋からクライマー達が居る百丈岩の基部を見学し、一般コースで百丈岩の岩上に立ち 360°の展望を満喫＆昼食。静ヶ池経由の縦走形式で南下した。稜線で小雨が降ってきたので、更なる山道を止め、歩きやすい方の住宅地の舗道を歩いた。

９．サンマパーティー

開催日　H23.10.1～10.2
内　容
第 1 部　バーベキュー、シルクロード公演、老人のためのストレッチー体操
第 2 部　お茶会、ワンゲルの歌、中国茶芸
第 3 部　活動報告
第 4 部　バーベキュー
第 5 部　日帰り温泉、討論会
第 6 部　重低音演奏会（寝たもの勝ち？）
第 7 部　野外朝食
第 8 部　お茶会、剪定実技発表
第 9 部　うどん打ち講習、うどん試食
第 10 部　お茶会、後片付け

「ＯＢ会中部支部」をつくろうかと（協力していただける方の募集）

24 期　坪井 陽典

名古屋で好き勝手に生きている 24 期の坪井です。私に与えられたスペースは半ページですので早速本題に入らせていただきます。

ＯＢ会では、すでに関東支部、近畿支部が立ち上がっています。それを横目で見つつ、４～５年前から「中部支部もあれば。」と思い、３年前のワンゲル 50 周年（平成 20 年 9 月）のときにも一部の方々とは中部支部創設の話

をさせていただきました。

しかし、それもそのまま立ち消えで、今日に至っているというのが現状です。

もうそろそろ本腰を入れて立ち上げないと、このまま永久に立ち上がらないままだろうと思い、今回原稿を書いた次第です。

ただ、ＯＢ会中部支部を立ち上げると言っても、パッと考えただけでも次のような問題があります。箇条書きにすると、

１．協力していただける方はいるのか？

文書発送等の事務局の仕事は、私のところでするつもりです。しかし、企画等は私一人では無理ですし、しかも、私一人ではＯＢの方々の意に沿わない、独りよがりのものになる恐れがあります。ですから、協力していただける方が不可欠です。

２．中部支部の構成員の範囲

愛知・岐阜・三重は中部としても、静岡は関東？中部か？長野はどうか？

３．中部支部で何をするのか？

これは、活発な近畿支部の方のお話が参考になるかと思っています。

４．今後の中部地方のＯＢの方への連絡

個人情報保護が厳しく問われている昨今、ＯＢ名簿を頼りに、勝手に文書を発送してよいものか。

等々山積しています。

興味がある、なしに関わらず、協力していただける方がいらっしゃいましたら、次のところにお電話・FAX・メールをお願いいたします。電話は留守番電話のときもあるかもしれませんが、「ワンゲル△△期の○○です。」と吹き込んでいただければ、こちらから折り返しお電話をさせていただきます。

また、こちらからお電話等で連絡をさせていただくＯＢの方もいらっしゃるかと思いますが、何卒よろしくお願いいたします。

弁護士　坪井 陽典（つぼい ようすけ）
〒460-0002
名古屋市中区丸の内 3－23－8　フレーヌ丸の内ビル 2 階 A01
はるき法律事務所
TEL　052-951-5115
FAX　052-951-5119
e-mail　info@haruki-law.com

ハイデルベルクとオックスフォード ２つの大学都市を訪ねて

17 期　小島 敬

ハイデルベルクとオックスフォードという２つの大学都市を訪ねる機会がありましたので、レポートします。

１．ハイデルベルク

「お城の中の大学」に憬れて金沢大学に入学したのは、39 年前の 1972 年でした。「ドイツのハイデルベルク大学と並んで世界にたった２つしかない『お城の中の大学』」というのが、当時の金沢大学の謳い文句でした。大学卒業後も、ハイデルベルク大学はどんな「お城の中」にあるのだろうと、ずっと気にかかっていました。出張や観光でヨーロッパへ行くことはあっても、なかなかドイツに寄る機会はありませんでしたが、2010 年 7 月、ようやくハイデルベルク大学を訪ねることができました。

７月２日（金）、チューリッヒからドイツ特急 ICE でハイデルベルクに入りました。ハイデルベルク大学で開催される博士号の学位授与式に出席（もちろん私がもらうわけではありません）するためです。1386 年に創設されたドイツ最古のハイデルベルク大学（学生数３万人弱）は、ノーベル賞受賞者を多数輩出している世界的な大学です。

旧市街中心部のマルクト広場に面した築 400 年を超える建物にあるホテル Zum Ritter にチェックイン。スーツに着替え、大学広場にある旧大学校舎へ。大学の 500 年祭を記念して 1885 年に改装された重厚な大講堂で授与式が開催されました。この日は、人文系の 100 名強に博士号が授与されました。学生に倍する関係者（親族や友人達）が出席していました。学生がひとりずつ研究科長に名前を呼ばれ、学位申請論文の内容がユーモアを交えて紹介され、学位記が授与されていきました。ドイツだからお堅いイメージを予想していましたが、日本の大学院の修了式よりずっとカジュアルな雰囲気でした。

７月３日（土）、午前はハイデルベルク市内（城、旧市街）を散策しました。ハイデルベルク市は人口 14 万 5 千人、ドイツにおけ

る学術・文化の中心地です。市は 14 の区に分けられ、ネッカー川の南に東西へ拡がる旧市街は、ベルクハイム区（西側）とアルトシュタット区（東側）から構成されています。ベルクハイム区はアルトシュタット区よりも歴史は古く、いわばハイデルベルク発祥の地です。元ＫＵＷＶベルクハイム編集長としては外せないポイントです。ハイデルベルク城へは、マルクト広場近くの駅からケーブルカーに乗って５分あまり。城からはハイデルベルク旧市街を一望できました。第二次大戦の連合軍による空爆を受けなかったので、古い街のたたずまいがそのまま残っています。ネッカー川に架かるカール・テオドール橋の対岸の丘には「哲学者の道」が望めました。橋のたもとにはバロック風のブリュッケ門があります。この城門は、かつての城壁の一部だそうです。今は、城壁は残っていませんが、14 世紀には現在の旧市街を囲むように城壁が築かれていたそうです。午後は、ハイデルベルク大学の新キャンパスが拡がるネッカー川北岸のノイエンハイム区へ。このキャンパスには、自然科学系の学部や医学部の他、研究者用のゲストハウスが点在しています。広々とした新キャンパスの一角にあるレストランで、ビールとピザのお昼。昼食後は旧市街に戻り、ハイデルベルク大学の学生食堂内の特設会場の大型スクリーンでドイツ X アルゼンチン戦を観戦。試合が近づくにつれ、街も会場もすっかりワールドカップ・モードに。ドイツ国旗のトリコロール（黒、赤、黄）が街に溢れていました。私たちもドイツの小旗とトリコロールのレイを買い、ドイツを応援しました。応援の甲斐あってアルゼンチンに圧勝！チューリッヒへの帰りの ICE の食堂車でも祝杯。頬にトリコロールのフェイス・ペインティングをした可愛いドイツ娘が給仕をしてくれました。

ヨーロッパや中国では、市街地の周囲が石やレンガの城壁で囲まれた城郭都市が発達しました。城壁の中で城主を始め市民も生活を営んでいました。ハイデルベルクも現在は城壁こそ残ってはいませんが、そうした城郭都市のひとつだったわけです。以前訪れたポルトガルのエヴォラやスペインのアビラも、当時の城壁をそのまま残す城郭都市でした。日本では城郭都市は発達せず、領主だけが城郭を持って武士や町人は城の外（城下）に暮らすという形態が一般化しました。今回ハイデルベルク大学を訪問して、ハイデルベルク大学も「お城の中の大学」だということが分かりました。ただ、それは「城郭都市の中の大学」だということです。ポルトガルのエヴォラにも、エヴォラ大学が城郭の中にありました。ヨーロッパの他地域や中国にも、城郭都市の中にある大学が存在するのかもしれません。

金沢大学のホームページの「K-Dictionary 沿革」には、今でもこう記載されています。「お城の中の大学　世界でたった２校？実はほんの 20 年前まで金沢大学は角間の地にありませんでした。どこにあったかというと、なんと場所はいまの金沢城跡。当時はドイツのハイデルベルク大学と並んで世界にたった２つしかない『お城の中の大学』として全国に知られていました。」どうして、金沢大学がハイデルベルク大学だけを取り上げたのでしょうか。「必ず一次資料に当たる」、「現地で事実を見極める」のが研究者の基本です。近代以降のハイデルベルク大学が城壁にすら囲まれていなかったことを金沢大学の関係者は知っていたはずです。金沢もハイデルベルクも、空爆を受けず古くからの家並が残る緑豊かな街、文豪が愛し文化の薫り高い街という共通点を持っています。マイヤー・フェルスターの『アルト・ハイデルベルク』は日本の旧制高校生の愛読書でもありました。ゲーテが恋に落ち、ヘーゲルやマックス・ウェーバーが思索をしたハイデルベルク。こうしてみると、金沢大学の関係者がハイデルベルク大学に親しみを持ち、同一視しようとした心情は十分理解できます。憧れも含め

「ドイツのハイデルベルク大学と並んで世界にたった２つしかないお城の中の大学」と称したのでしょう。金沢大学は、おそらく領主の居城の中にある世界で唯一の大学です。こんな贅沢な大学は世界で金沢大学だけでしょう。「世界で唯一の大学だった」と過去形で言い換えなければならないのは残念です。今さらながら「お城の中の大学」で学生時代を過ごせたことは素晴らしい経験だったと思います。お城の中の大学でなければ、我々の「ワンゲル坂」も生まれなかったわけですから。

２．オックスフォード

2011 年８月、イギリスのオックスフォード大学を訪問する機会がありました。英語圏最古の 38 のカレッジから成るオックスフォード大学には、２万人強の学生が在籍しています。

８月７日(日)、ロンドンのパディントン駅から電車でオックスフォードへ。オックスフォード市内北部にある大学院専門のウルフスン・カレッジ(1966 年創設)を訪問。モダン・カレッジなので設備は新しく快適です。敷地も日本のひとつの大学ほどの広さがあり、カレッジの隣には牧場が拡がっていました。敷地内には小川が流れボートハウスもあり、森の中ではリスを見かけました。私たちはカレッジ内にあるゲストハウスに泊まりました。

８月８日(月)、カレッジ内の食堂で朝食後、カレッジの図書館や研究室等を見学。施設が新しいので、日本の大学とあまり変わらない印象を受けました。市の中心部にはオールド・カレッジが集まっています。今晩泊まるコーパス・クリスティ・カレッジ（1517 年創設）へ移動。クライストチャーチ・カレッジ（1546 年創設）とマートン・カレッジ（1264 年創設）に挟まれたオックスフォード大学で最も小さなカレッジです。石造りのカレッジ内のゲストハウス（ロイヤルスイート並みの広さにびっくり）に荷物を置いた後、このカレッジのニール・マクリン先生にカレッジ内を案内してもらいました。教会、ハイテーブルのある大食堂、中庭、図書館、マクリン先生の研究室等、500 年近い歴史を感じさせる荘厳なカレッジ。映画ハリー・ポッターの世界です。先生は、正午からご自身が委員長を務める４年に一度の大きな学会の始まるお忙しい身でしたが、ご丁寧に対応いただき、そのホスピタリティには本当に感心しました。

ハイデルベルク大学もオックスフォード大学も、古いキャンパスはそのまま残し、新しいキャンパスは郊外へと拡大していきました。金沢大学の城外移転の理由が「教育、研究環境が手狭になった為」ということであれば、何故、城内キャンパスはそのまま残し、郊外に新キャンパスを作らなかったのでしょうか。残念でなりません。かと言って、今から角間キャンパスを城壁で囲って「お城の中の大学」と称しても誰も喜ばないでしょう。これからの基幹大学は、世界と地域に開かれた大学でないと生き残れないと言われています。オックスフォード大学やハイデルベルク大学では外国から多くの学生を受け入れています。また、ハイデルベルク大学では、高齢者・市民向けの講座も開催され、たくさんの社会人が学んでいます。「お城の中の大学」だった歴史を大切にしつつ、金沢大学が、世界と地域に開かれた大学として発展していくことを願っています。

ガン闘病の記

６期　合津 尚

それは突然の吐血であった。６月 28 日の早朝に吐き気がしてトイレに駆け込んだ(這って)。そこで大量の赤黒い塊を吐き出すこととなった。数日間の炎天下での走り込みや、庭仕事での疲労による熱中症の吐しゃが、幸いにも胃袋の異常を知らせてくれた。

近所の病院に行ったところ血圧が高い値で 86、脈拍も 53 とかでその場で入院。急な事態であったが、会社の賞与支給とか遺産相続手続きの途上で突然ストップもできず、無理に７月６日に出社して、８日にはいわき市の実家へ移動。そこで隣の主の葬式に遭遇し、酒が入り翌日の畑仕事では力が出ず、帰りの車中では意識朦朧でよくぞ帰宅した。

11 日(月)の検査では出血によるヘモグロビン濃度が通常の１／３とかで、再度入院。胃カメラから各種の検査で胃ガンとの宣告。「ほんまにマジかよ」と意外とクールに受け止めた。ところがどこまでガンが拡大しているか判断つかないとかで、胃袋の全摘出の見立て。本人も冗談じゃないと思ったが、家族が手配してくれて虎の門病院の受け入れが可能となった。

22 日に移動し、やれやれであったが、それから再度検査の日々で、この頃の体重は普段から４Kg 減の 64 キロで血圧が 107～50。胃カメラで内部を見せてもらうと、凹凸ばかりでどこが傷口か素人には見えない。出血の傷(ガン)は胃袋の下半分にあるので、飲酒が元ではないとは本人の判断だが。８月３日の手術までは順番待ちを含めて、大腸などの臓器の検査と手術による肺炎予防とかの準備期間。大腸の内視鏡検査のために、清掃用のニフレックという２リットルの下剤を飲み、トイレが 11 回目でやっと清浄になる。この検査でポリープが見つかり、即除去したのは余禄か。この間は会社の人間の見舞いと(冷やかしも含めて)、仕事の相談やら司法書士と相続の書類の話、病院の図書室でガンの勉強、体力低下を防止するための腹筋運動やストレッチと退屈はしなかった。

前日の説明でガンの進行度がどの程度とか、リンパ節への転移とか、播種(胃袋に孔が開きタネが腹腔内に散らばる)があるかもとかさんざん脅かされた。３日の手術は本人の記憶はないが、時間は３時間 40 分とかで短い部類とか。ミゾオチから臍まで 15㎝ほど切開し、胃袋の２／３を摘出。残りと十二指腸を接続したので随分と小さな袋になったようだ。これを定形手術と称して段取りが決まっているようだ。縫合はチタン合金のホチキス止めだから、無理してもはずれる心配がないはず。

翌日からキャスター付の点滴棒に管を６本(輸血、点滴、鼻から胃内部の排血、酸素吸入、小便、麻酔など)ぶら下げて病院内の廊下を歩く。院内の廊下は一周が約 100M で初日はやっと３周したが、それよりもベッドからの出入り時の傷口の痛みが大変。術後の運動が回復に効果があると、これは推奨というより強要に近い。エコノミー症候群の予防が目的なのだが、この為に脚に巻きつけたマッサージ装置がやたらと痒くてまいった。

その後は少ない食事を如何に時間をかけて食べるか、歩行訓練をどれだけやるか、肺炎予防の為の肺の拡張と予防剤の吸入などの日課であった。点滴から流動食になっても体重が減少し始めて、退院時には 61 キロまでになっていた。歩行練習はその後毎日増加し、一週間後の抜糸の時には 35 周と 10 階の階段昇降を数回やるまでになった。この時期は僅かばかりの食事量ながら、食べ急ぎによる胃部の張りとか隣の住人のイビキや便秘対策とかに悩まされた。徐々に点滴棒の管も減り、10 日後には全ての管から自由の身となった。そして血圧が 120 台に回復したので、屋上の運動できるスペースで軽いジョギングを開始した。およそ２時間のストレッチと階段昇降などの運動時間と、甲子園の高校野球が暇つぶしとなっている間に、手術後 13 日での退院となった。

退院時における医師の説明では、病状は６段階分類の軽い程度からの２段階で、リンパ節移転なし。播種という胃袋の壁を破ってガン細胞が飛散することもなし。予想外に軽度であり、退院後の抗がん剤の服用もない、ヤレヤレ助かった。結果的には吐血による早期ガンの発見は単なる偶然であったが、入院中の一ヶ月ばかりは少しばかり真剣に今後の人生とかを考えた。田舎の資産を相続したばかりで、５～６年の余命では周りに迷惑かけるなとか、やるべきことは何か？やりたいことはなにか？とか考えた。でも退院してしまうとシリアスさは消滅してしまい、すぐに従来の生活パターンに戻ってしまった。会社の往復と朝晩のランニング、術後３週間でゴルフの誘いがあり少し早いかなと思ったが普通にプレーできた。

手術で変わった点は、酒はもちろん量は少なくなったが美味しく感じないこと、食事の量が減り回数がやたら多くなったこと、専門用語で「高張」な食物(炭水化物・甘い物)を多量に食べると発生するダンピング症状で苦しくなること、胸やけがする、便秘になりやすいなど。

良かったことは、少しばかり生活面では慎重になったこと、酒の量が減ったこと、最も効果的だったことは体重が理想の 62～63 キロ、体脂肪率が 14%ぐらいに抑制できそうなこと。これは今後のマラソンの記録の改善に寄与するはず。冬に申し込んであった 100Km ウルトラマラソンが９月 25 日にあり、参加を迷ったが 65Km まで走れた(フル＋ハーフに相当)のもその効果か。

経験したことで判明したことは、胃には神経が無く痛みを感じないこと。昨年９月にバリウムとＸ線検査をしたが、何の自覚症状もないし、検査の結果からも早期発見が無理とのこと。医者の言うにはやはり胃カメラの検査が早期発見には有効だそうです。

学習した要点を、紙面を借りて以下に報告します。

① どうして胃ガンになるか、喫煙・過度の飲酒・過多の肉食・運動不足・多量の塩分の摂取などとピロリ菌が胃内部に存在する。ピロリ菌に感染する確立は 50 歳以降では 70～80%です。

② 次にガンの発生と成長ですが、１cm に成長するのには少なくとも十数年を要するが、これが４cm の進行ガンに成長するのには２年から４年ですむ。私のガンは、従って 50 代後半に発生していたことになる。

③ １cm 以下のガンでは自覚症状がないし、検査では見つからない。ただし、10cm になると半数の人は死亡する。

さて、ガンの早期発見はガンの一生のうち僅かに１～２年の期間に限定される。このタイミングで発見するには、ＣＴやＭＲＩなどの画像検査とＰＥＴの放射線検査があるが、費用はそれなりに高額である。これらの医療行為によって被ばくする程度は平均で年間 2.25 ミリシーベルト、自然界に存在する放射線からの自然被ばくは平均 1.5 ミリシーベルト、原発によって１ミリシーベルトを受けると 3.8 で５ミリシーベルト、まだ目安の許容値以下だそうです。

ガンの治療には、手術によって病巣と周囲のリンパ腺の切除をする、放射線治療は手術に向かない咽頭ガンや乳ガンなどに有効、科学治療(薬)は副作用のある抗がん剤以外にも治療薬が開発されているなどがある。

さて費用の件ですが、手術直後の２日は差額ベッドの部屋であったが、あとは４人部屋で総額は支払った費用が 15 万円程度で、これも高額医療費助成制度があり、後日かなりの金額が還付される予定です。

終わりに、今後気を付けることは、傷口が収縮するのに引きずられてネコ背にならないこと。ガンのことは念頭から消えるだろうが、６ヶ月毎の定期検査はサボらないこと。参考までにと長々と書きましたが、皆さんの参考にならないことを祈念します。

以上

還暦のキリマンジャロ

15 期　舟田 節子

誰もが順に迎えていく還暦…それが、私の場合は東日本大震災のあった年と重ねて記憶されることになりました。日常が瞬時に消えた方達のことを思えば、還暦を節目に…などと能天気な展開はやれなくなってしまいました。昨年の会報で深田百名山の完登を報告した後に、新燃岳の噴火がおきました。これは百名山を狙っている人達にとっても災難だなと思っていたら、それを上回る大災害が勃発したのです。よく、「お金と、暇と、健康と」…という言い方をします。実は、天変地異がなければ…という大前提があって、次に言えることであったのです。不謹慎ですが、昨年のうちに仕上げておいてよかったと思ったものです（６月の庚申山で初めて膝痛を体験した時は、もっと痛感しました）。たかが山遊び、そして「山は逃げない」にしても、人間の方は様々の事情をかかえてしまうものなのです。仕事や、地域の役職や、親の世話や、孫守の間を縫って、さらには自身の加齢や、伴侶の加齢も考えたら、「思い立ってパッと出掛ける」なんて贅沢がやれるのは、わずかな間だと思われます。性懲りもなく、今年もすでに山遊びは 70 日を越えようとしています。

客観的にビッグな山行となれば、８月下旬に登ったキリマンジャロが挙げられます。5895m のキリマンジャロは、アフリカ大陸の最高峰でもありますが、特別な装備も、特別な技術もなしに登れる、世界最高峰でもあるのです。国立公園や世界遺産としての整備が相応になされていて、一般人もツアー参加でチャレンジでき、高度順化が出来るかどうかだけがネックになります。

花を見たい私としては、雲南省の四姑娘あたりを考えていました。が、トレッキング友人がキリマンジャロを狙っていたことと、実際に 10 日間程度出掛けられるのは夏休み中しかなかったことから、そんな選択になりました。同時に目に留まることもなかった「70 歳以上は…（検診の結果、受諾できない場合がある）」の断り書きがグサッときたのです。生身の体が、いつまで、行くの行かないのと、逡巡できるというのか？！知識や慣れで誤魔化せてはいるものの、明らかにバランスは悪くなり、躓いたり、滑ったりが増えています。中高年は元気といっても、免疫力は 20 歳の頃の１割に落ちている…それが実質的な中身の現実です。ツアー料金を払って、ガイドがついて、ポーターが運んでくれたにしても、最終的には、誤魔化せない次元での体力、気力がものを言うことになります。そろそろ登ってみようかと、呑気に思い至った頃には、もう登れない山になっているかもしれない…。20 年以内に消えるであろうと言われている頂上部の氷河は、どうせなら見ておきたいとは思いましたが…。ですから憧れというよりは、逆算の発想で、今登らねばの決断になった山でした。

この経過はいつものように帰国後、大集中で 38 ページの紀行にまとめ、仲良くなったツアー同行者と親しいワンゲルＯＢに配布しました。大枚をかけたら、とりあえずまとめないと、世間様に申し訳が立たないような…その種のプレッシャーを感じて、何はさておき状態で仕上げてしまいます。今はデジカメとＰＣがあるので、そんなこだわりでの後始末も容易になりました。結果、特に塩尻あたりで、かなりコピーされて読まれているようです。相当具体的に書いていますので、5895mに憧れる方には、役立つガイドになるであろうとは思います。

そのサマリーとなると、今回については一番移動負担が少ないということで、成田からアムステルダム経由でキリマンジャロ空港に入りました。登山口の標高は 1800m。２日目は 2727 m。３日目は 3720m。ここで一日高所順応日をとり、4100mの丘へ散歩に出ます。５日目の最終泊地が 4700m。６日目は真夜中に出発し頂上アタック。まず頂上の一角であるギルマンズポイント（5682m）を目指し、そこを規定時間（６時間）内で通過できれば、最高地点のウフルピーク（5895m）を狙います。そのうえで一気に 3720 mまで下りてしまいます。

ネパールであれば一日あたり 500mアップで押さえるのですが、アフリカは気温が高く、赤道近くで空気の密度が濃いので、高度障害が出にくいという解釈から、こんな行程になっています。大枚払ってアフリカまで出掛けて、手前のギルマンズポイントで満足という人がいるわけはありません。しかし、高度障害が出て動けなくなってしまう人が必ず出ます。もっとゆっくりとなると、高所での滞在時間が伸びての危険が増していきます。スピード不足に対しては

ガイド判断でのストップ指示が出ます。私達の場合は、ギルマンズポイントを４時間半で通過し、14 人中の 10 人が最高地点に到達できました。それこそ５歩歩いてハアハア、10 歩歩いてヒーヒーの状態で頂上標識にタッチしました。あとで皆さんも「頂上あたりの記憶がない」と言っていたくらいですから、朦朧状態でも歩けるような地形（火口壁を２㎞ほど回る）のお陰で可能ともいえます。

ところで、この５日前には 24 時間テレビのイベントで、イモト嬢と全盲のエリちゃんがキリマンジャロ登頂をやっていました。生中継は丁度日の出の時刻に行われ（場所はギルマンズポイントの下あたり）、残りの頂上までは１週間後の「行ってＱ」で放映されました。私は帰国してから、その録画を見ることになりました。あの辛くて、デジカメを出すどころではなくて（頂上と帰途では撮った）、やっと目指した標識が、「もう少し、もう少し」とテレビに映っているというのは、嬉しいような、いきなり絵はがきになってしまったような妙な気分でした。

もう一つのビッグイベントとしては、２月 11 日に主催した、谷口けい さん（世界で女性初のピオレドール賞受賞者）の講演会があります（下記記事有り）。ＡＴＳ社の深井さんに打診してから、すったもんだの５ケ月を過ごしましたが、山の文化館と女性センターの２会場で、盛況に終えることができました。

「やれる時にやっておく」「今という時間を大事にする」…それが、震災という年にあたり、一層肝に銘じることになった教訓です。やれる時にという点では、テント泊での羅臼岳～硫黄山縦走、避難小屋泊での飯豊の三国岳～門内岳縦走、栂海新道にもチャレンジしました。その合間にはシュラフや一式を積んで、夫と、花を愛でる山旅を楽しみました。

中高年登山ブームに、山ガール、山ボーイが加わって、昔は３Ｋと言われていた山遊びが、国民的スポーツといえる状態になってきました。ちなみに、先のキリマンジャロでは、私は 14 名中の若い方から３番目でした。中高年がこんなに世界の山遊びに繰り出しているのは、日本くらいです。まだまだ経済力にも、好奇心にも、行動力にも恵まれた国であり、日本人も、旅を、文化や感性として捉える人種であるように思います。「行ってきたよ！」と、年賀状や、会報に自慢できる間（自慢と思える間）、そしてメールで写真披露をやっている間は、それらにも助けられて、山遊びを楽しんでいけそうに思います。

谷口けいさん 金沢で講演会を開催

09年、女性初のピオレドール賞を受賞し、世界的アルパインクライマーとして活躍中の谷口けいさんによる、北陸で初めての講演会が、2月11日夜、石川県女性センターで開催された。

「自分にとってネパールより遠かった金沢」と、一気に会場を和やかにしてから「あなたの夢は？」と問いかけ、「私にとっての山は、決して特別無理なことをしようとしているのではなく……」と、けいワールドをぐいぐいと展開。壮絶な壁を登攀しながら、明るい会話の飛び交う動画に、会場からは感嘆のため息や笑いがあふれた。

未知なる世界への感動を、自分のメッセージを添えて、出会った人たちに届けていきたいという谷口さんの熱い語りに、満場の拍手が送られた。

同日昼には加賀市の深田久弥山の文化館でも講演が行なわれた。（文＝舟田節子）

「あなたの夢は?」と参加者に質問する谷口さん

15 期 還暦同窓会

15 期　舟田 節子

締切の 10 日を 2 週間以上過ぎていますが、同期会自体が 11 月 26〜27 日の開催でしたので…。苦労した幹事が報告までやればいいんですが、筆の走る私が、さらにゴーインを通したうえでないと、とても掲載に至らない！と報告します。

同期最後のめでたい結婚披露宴の後、「このままでは再会の機会がなくなる」と始まった 15 期同期会は、無事に 26 回目＝京都大原での還暦同期会を迎えることになりました。

「無事に」といっても、その間には高村栄一さん、比田井<旧姓石田>忠篤さん、横井昭次さん、そして東日本大震災の翌日に渡辺純久さんを失っています（宇野夫人<旧姓山田>和子さんも）。

何より、一回生の新トレで、（私の場合まだ同期の認識もないうちに）桂茂樹さんを失うというアクシデントからスタートした仲間達でした。部の存亡の危機と立ち上がってくれた諸先輩方にも育てられ、その勢いのままに活動域を広げて、現役時代を謳歌していたと思います。卒業後にも早々と仲間達を失うことになってしまいましたが、震災後、最強のキー・ワードである「絆」の価を彼らは私達に悟らせ、同期会をさらに支えてくれたに違いありません。

「同じ釜の飯を食った仲間」という言い方をダサイと考えた時期が自分にもあります。しかし、いざ還暦まで来てみると、子供を通してのご縁は子供の卒業で消え、仕事での付き合いも退職すれば消える…もちろん子供の結婚で増える付き合いや、孫で広がる世界もあるのですが…。何と言うか、自分探しにウロウロしていた頃の仲間というのは、そういうことを一緒に客観視して、笑い合い、励まし合い、「さあ、また元気に生きていこうぜ」がやれるものなのですね。

それこそ、近況報告に、子供の入試、就職、結婚が加わり、さらには娘の里帰り、孫守、親の介護・見送り、退職、年金、住まいのリフォーム…。同じ時代を生き、同じ波を乗り越えながら生きている…なおのこと、同調していけるのかもしれません。

ですから、アフリカのキリマンジャロに挑戦した私の報告より、「前座・前座！」で始まった松林さんの「四国お遍路結願報告」の方がはるかに受けました。「15 期お遍路ＰＷを何回かに分けてやるか？」の話も出ていました。もっとみんなが暇になったら、それも実現可能かもしれません。もっとも同行二人の清々しい境地とは程遠く、顰蹙を買いそうな予感がします。

さて、会場は京都大原寂光院のすぐ手前の大原山荘でした。三宅メイン幹事が早々に確保してくれたお陰で紅葉真っ盛りの最高のロケーション。渋滞や溢れる人並みを抜けて、無事全員集合できました。そのうえゴーインに、宴会も、上映も出来る部屋を特注してありました。大原地鶏のすき焼きを、大原地鶏の卵に浸しながら戴きます。法事のため、夜行で帰宅するという坂尻さん夫婦の都合で、早々に近況報告を始めたものの、どなたも時間オーバー。それは還暦ということで（もちろん、昨年でお済みの方も）、年金暮らしが始まった方や、節目報告が多かったせいもあります。奥様方には「主夫」誕生を待ち兼ねていた方も多かったようで、実際、男性陣はワンゲルのキャリアを大いに活用しているようでした。また、体調や健康管理の話題が増えたのも年相応といったあたりでした。

久しぶりにワンゲルソングが登場。それも、11 期 加藤さんが編集して下さったものに、三宅幹事がさらに 15 期好みの歌を追加して用意してくれたＣＤと歌詞カード。芹洋子のリズムは記憶とは少々違っていたけれど、これから、もっと口ずさむシーンが増えそうです。そして、赤頭巾、チャンチャンコの写真も撮りました（これはＯＢ会近畿支部の影響大）。

翌日は、三千院へ移動。みるみる増えていく人込みに圧倒されつつも、まだ空いているといえるうちに、拝観することができました。間所写真係、宇野三脚付き記録係により、そこらじゅうで記念写真を撮り、予約の料亭で上品な弁当昼食を戴いて、14 時解散。その晩には、もう写真が送信されて、楽しかった時間を反芻できました。

我が家の場合、夫の奈良での学会出席もあり、三百名山の葛城山と比叡山登山も追加した欲張り旅行でした。渋滞と駐車場なしのせいで、安易な登頂しかできなかったのですが、夫は帰宅後「芹洋子の歌が好きだから」と、例のＣＤをコピーして赴任先へ持っていってしまいました。私の薫陶（？）で、笈も毛勝も、三大雪渓も、三大急登も登ってしまい、花も断然詳しくなってしまった旦那…（地元ガイド本ではアッシーとカメラマンをやっています）。

しかし、ワンゲルソングが歌えないのが、最後まで「違い」で残るのだろうなと思っていました。え～？！

一緒に歌える日が来るの!! なおのこと、感謝でいっぱいになった還暦同期会です。

最後は我らが主将であった間所さんの送信文で締めることにします。

「出会った頃は、還暦の祝いをみんなで迎える時が来るとは想像も…。来年又元気にお会いしましょう！」

妙高・頸城山群の山スキー

26 期　畠山 潤

100 年前の日本にオーストリアからスキーの技術が伝えられた。場所は現在の新潟県上越市。私の住む街である。北大でのスキーの試行の方が 3 年早く、これによってかつて発祥地論争が起きたが、正式にスキー術を一般に伝えたことにより上越市高田の金谷山が日本のスキー発祥地とされた。新潟県の南部、上越頸城地方は豪雪地帯として知られ、平地でも 2ｍ を越える積雪はざらである。少し前にアライスキー場が営業していたときは、しばしば 7ｍ を越えたものである。このような背景があって、この地方でのスキー活動は盛んである。スキー汁、スキー正宗、カザマスキー等スキーを冠したものも多い。私も 16 年前に転勤で直江津に越してからこの地域の山スキーを楽しんでいる。今回、これまで滑降した幾つかの紀行文に写真と版画を添えて紹介したいと思う。ここに記載するのは、ガイドブックなどに掲載されている一般的なコースとは趣が異なり、かなりマニアックなコースである。記録もない未知の場所が多いので、コース探しには自分なりの事前調査を行う。斜面の方角、雪の付き方や斜度を様々な方向から観察し、偵察山行も行うこともしばしば。滑降コースを下から登ってコースの確認と雪質をチェックすることも多いが、雪が繋がっていなくて途中で引き返すこともある。慣れてくると地形図を見るだけで滑降コースが読める様になってくるが、最終的に滑降できるかどうかはその時の雪質、斜度、天候、自分の技量で決める。近年、山スキーがバックカントリースキーと呼ばれるようになってこれを楽しむ人は増えている。メジャーなツアーコースに人が集中する傾向にあり、夏山で百名山が混雑するのと同じである。情報過多の現代は、情報がないコースをわざわざ選んで登る人は少なくなっている様だ。物見遊山的なピークハントや自然の雰囲気を味わう山旅的な縦走を現役時代に行い、今でもこれを懐かしく思うが、登山の本来の楽しみは初登頂・初登攀に代表される未知なる冒険への挑戦だとも思う。しかしながらヒマラヤの初登攀に比べると私などはちっぽけな冒険で、こんなマイナーなルートを登り滑降する行為が創造的登山といえるとは思わないし、ここでルート紹介しても誰の役にも立たないが、地域にこだわった自分なりのコースを探し出して登山を楽しんでいるモノもいるということで読んでいただければと願う。

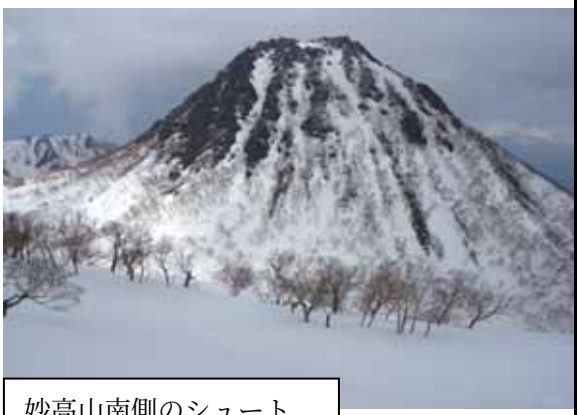
妙高山

妙高山は上越地方の象徴的な山である。赤倉山、三田原山、大倉山、神奈山へと続く外輪山の中心に溶岩ドームの妙高山がデンと鎮座している。笹ヶ峰から涸沢経由で、あるいは杉の原スキー場から三田原山に登ると妙高山の南側が姿を現す。妙高山は南側にシュートが 3、4 本有るが、向かってやや右側にシュプールが付いていることが多い。私も最初に妙高山を滑ったのはこのコースで、短いが程良い傾斜と真っ直ぐなコースは快適だった。左側のシュートほど傾斜が急になり、岩に挟まれたルンゼ状のここを滑る人はあまりいない。

池ノ平や赤倉温泉のスキー場から眺める妙高山の東側は溶岩ドームの爆発火口の崩壊地であり、火砕流が北地獄谷を形成した。燕温泉から春遅くまで雪が残る北地獄谷を詰めて、あるいは冬に赤倉スキー場の下から滝沢尾根経由で前山をトラバースしながら登り、鎖場の上から滑降すること数度、これに飽きたらず頂上から東壁を滑降できないものかと登山道の尾根よりも 1 本北側の尾根を登ると、頂上直下の山の字雪渓へと細いながらも雪は繋がっていた。山の字雪渓へは三角点がある妙高山北峰と南峰の間からドロップする。山の字雪渓の出口は、時期や年にもよるが 5 月中旬で最小幅 2 ～ 3 m傾斜 50 度の細い雪壁である。ここを慎重に斜滑降とジャンプターンでクリアすると、北地獄谷とその下の称名滝へ繋がる白いスロープが続く。

妙高山北側も崩壊によって形成されたルンゼ群がある。頂上から大倉谷に向かって北東に延びる中央ルンゼが最も大きいが、頂上直下は凡そ 55 度の傾斜で多くの岩が露出しており私の技術を越えている。三角点のある妙高山北峰からルンゼ群の降り口へは雪が繋がっておらず藪こぎになるし、ルンゼはたくさんあって上から眺めても降下点が不明

瞭なので、地図上の長助池付近の下から滑降コースを確認しながら登っていくことにする。妙高山北峰から真北に伸びる雪渓が滑降可能な様だ。これは北面ルンゼ群の一番西側に当たる。滑り初めは傾斜 45 度で幅が狭いが、ここを過ぎると広い雪の帯が大倉谷の下の方まで続いている。南側のシュートに比べると難度、スケールともに一段上である。



妙高山南側のシュート

神奈山

頸城平野に桜が咲く４月中旬に神奈山北斜面に跳ね馬の雪形が現れる。杉みき子の童話にも出てくる妙高山の跳ね馬シブキは、正確には神奈山山腹の雪形のことを指すのである。高田城の夜桜だけでなく、跳ね馬の雪形が現れるのを見て新潟上越の人々は春を感じる。神奈山頂上から真北に延びる尾根を滑降すると、跳ね馬の背中あたりを通過し、神奈山東側の尾根を一段下ったところから真北の谷を下ると跳ね馬の足下となる。近くで見る跳ね馬は巨大な岩で、どこが頭だか足だか判別不能である。ここをどこまでも下っていくと自衛隊の演習場に出てしまうので、滑った分登り返さなければならない。

火打山

火打山の南斜面は春に多くの人が訪れる山スキーのメッカである。一方、穏やかな南側と打って変わって火打山の北面は厳しい様相を呈している。

糸魚川の笹倉温泉から登る溶岩台地からの焼山の噴煙たなびく風景は有名だが、ここから眺める火打山の雄大さも忘れることができない。賽の河原のギャップを渡ると城塞の様な火打山の北西壁をバックに木が１本だけポツンと立っている所がある。この風景が好きで、これを見るために何度も北西壁を登り、そして滑降した。火打山北西壁は幾つものルンゼが入り組んでいる。向かって右側のルンゼが最もスッキリしていてお気に入りのコースだ。午後にならないと日が当たらないのでクラストしている場合が多いが、雪質を見誤ることがなければ 40 度プラスの傾斜はそれほど厳しくはない。北西壁を登って滑降が厳しそうな雪質ならば、頂上から北に延びる空沢尾根や陰火打から西北西に延びる一般コースからエスケープすればよい。

新井の矢代川から眺める火打山右側の新建ドームには４つのルンゼがある。左側から第１～３ルンゼ、高高ルンゼである。第１ルンゼは狭く直線的だが何時行ってもデブリで覆われていて快適な滑降は望めそうもない。第３ルンゼへは５月頃には尾根上に雪が繋がっていないことが多く、最も広く標高差のある第２ルンゼが滑降の対象となる。火打山頂上から真北に延びる尾根を降りて平らになった所が新建尾根と空沢尾根の分岐点の新建ドーム頂上である。ドーム北西側が第２ルンゼの降り口となる。滑り初めが 45 度の斜面だが、朝日を浴びて緩んだ東側の斜面は落石が少なく快適なジャンプターンで下れる。５月の中旬にここを２度ほど滑り、澄川を火打山まで登り返して笹ヶ峰に下った。雪の多い年の４月上旬だとそのまま澄川を滑って矢代川第３発電所まで下れるだろう。

火打山頂上にて

阿弥陀山

来海沢部落から海川第一発電所を過ぎてデブリで覆われた海川渓谷を進むと視界が開け、通称 732 高地と呼ばれる発電所取水口の台地に出る。ここは海谷の上高地と呼ばれ、残雪の頃は水芭蕉と新緑が美しい桃源郷だが、早

春の今は静寂に包まれた白銀の世界だ。ここから阿弥陀山頂上から南西に延びる沢を登っていく。沢の最上部の地図上には崖マークが付いているが、雪が付いていれば普通の斜面である。頂上からの眺めは、東側の吉尾平側と南側の阿弥陀山南峰方面の絶壁の高度感が素晴らしい。732 高地の白い台地を目指しながらの阿弥陀山南西沢の滑降は傾斜が緩くデブリもなく雪質も良く快適である。

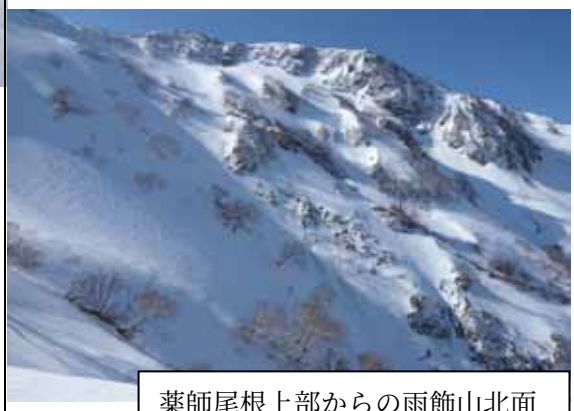
焼山温泉から入山し吉尾平から見上げる阿弥陀山と烏帽子岳の東側の岩壁は荒々しく、とてもスキーができる様には見えないが、１カ所だけ阿弥陀山の肩に雪が繋がっている。雪庇崩壊の危険が少ない風が凪いでいる曇りの日の早朝が狙い目である。雪庇を頭上にしながら登って行くのは心中穏やかでないが、何時崩れても逃げられる様に谷の中心を外して登っていく。雪庇を越えると阿弥陀山と烏帽子岳を結ぶ稜線に出る。阿弥陀山頂上へは稜線をやや西側にトラバース気味に登って行く。後ろを振り返ると烏帽子岳の尖峰が空を突いている。高度感溢れる烏帽子岳南西側は垂涎の斜面だ。さて、阿弥陀山の東斜面は朝日が当たって雪の緩むのが早いが、吉尾平を見下ろし岩壁を背にしながらの豪快な大斜面の滑降である。

烏帽子岳南面

雨飾山

雨飾山は小谷温泉からの南尾根上 P2 と呼ばれる 1838mピークからの滑降が一般的である。私も最初は小谷温泉から入山し、頂上から笹平経由で荒菅沢や夏道側の南東側の沢を滑っているうちに、糸魚川から見える北面の真っ白い大斜面を滑ってみたいと思う様になった。まずは 1472m、1673mピークを経由する北西尾根。1673mピークの広い台地にスキーを置いて細い尾根を辿ってピッケルとアイゼンで頂上を往復するが、雪庇に注意すれば頂上からの滑降も可能に思われる。糸魚川市の梶山新湯からの夏道のある薬師尾根は、無雪期ならばハシゴやロープのある急な尾根だが、これらが雪で埋まっている時期は頂上直下の笹平からの無立木の大斜面の滑降を楽しむことができる。

薬師尾根を何度か滑るうちに、薬師尾根西側の神難所沢滑降の可能性を考える様になった。ここには下部にルンゼ帯と滝があり、ここの通過がキーポイントになる。駒ヶ岳頂上から神難所沢の全貌を眺めることができるが、大雪の年ならば滝は雪で埋まっていそうである。大雪の今年の春、ここの往復滑降を目指した。梶山新湯手前から神難所沢を登っていく。幾つかの雪に埋まった堰堤を越すと、壁の両側からのデブリによって谷は覆い尽くされて、大滝は予想通り埋まっている。スキーを担いでアイゼン履いてこれを越していく。滝を越すと谷は広くなり雨飾山北面の大斜面が見えてくる。標高が上がるにつれてデブリは少なくなり、糸魚川の街を眼下に白い雪の斜面を登っていく。頂上西側の 1842m ピーク付近から滑降する。上部の 45 度の斜面はクラストして難しいが、傾斜が落ちてくると雪面が緩みデブリを避けながらの滑降となる。大滝付近のデブリはあまりに大きく、ここを下るにはスキーを脱がなくてはならないが、西側から巻いて小さな尾根を乗り越えた谷を下っていく。ここもデブリの山だが何とか滑降可能で、滝の下に合流する。堰堤を越えると春の日差しを浴びながらの快適な林道滑走である。



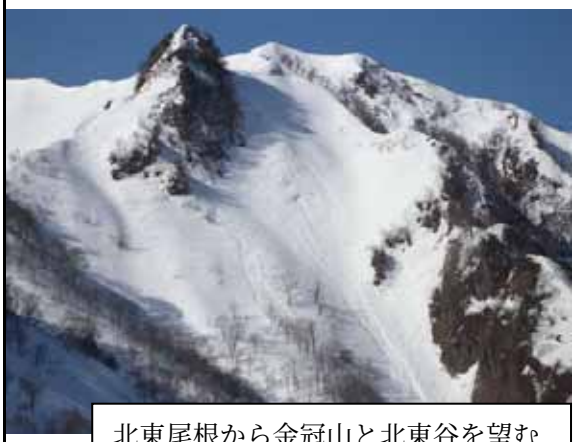
薬師尾根上部からの雨飾山北面

鉾ヶ岳

糸魚川、能生、そして自宅の直江津の海岸から真っ白い鉾ヶ岳が見える。標高は 1316m と低いが、海岸近くからそそり立つ姿は十分に立派である。頂上付近だけは穏やかな傾斜だが、これに至る尾根は細く谷はルンゼ状で深くて急峻である。まずは佐伯郁夫の「会心の山」にも紹介されている北東尾根を登る。佐伯氏は柵口部落から登ったが、溝尾部落から林道を 500mまで登り、そこから杉林の尾根を登っていく。杉林を抜けて 875mの尾根の上に達すると金冠山のドームが目に入る。これを直登して越えるのは大変なので、雪が安定している日を狙って北側にトラバースし、金冠山北東側の谷を巻く様に登っていく。1244mの大沢岳からは、北東の金冠山、北側の眼下には島道鉱泉と日本海へと続く高度感溢れる眺めが素晴らしい。鉾ヶ岳頂上から南に聳える火打山や海谷山塊の眺めを楽しんだ後、大沢岳まで緩やかな尾根を滑るとここからが本格的な滑降となる。金冠山北側の北東側の谷は滑り初めがやや傾斜がきついが広くて快適な斜面である。標高 600mまで滑って北東尾根に登り返して溝尾部落への林道をスキーで下った。

大沢岳から真っ直ぐ北に伸びるルンゼは最大傾斜 55 度の急斜面だ。北斜面なのでクラストしており、最大傾斜のルンゼ内は雪崩の通り道になっていて激しく波打った蒼氷になっている。これではジャンプターンの着地でビンディングが外れるかもしれないので、ルンゼ内でセルフビレーを取ってスキーをアイゼンに履きかえて下る。ここを過ぎると傾斜が落ちて広い斜面となりデブリが広がっていく。この日も東側にトラバースして北東尾根に登り返して溝尾部落へ下った。

島道鉱泉から大肩の背を経由して大沢岳に至る北尾根を登り滑降したのは６年前、今年はこの東側の沢を下から登った。島道鉱泉から下の台地に降りて２つの沢の内、山に向かって右側の西側の沢を登る。沢の下部はルンゼ帯となっており、ブルドーザーで運ばれた様なデブリや、左右の尾根から落ちてきた大量のブロック雪崩で埋め尽くされている。ここを抜けると視界が広がり、昨年滑降した大沢岳北側ルンゼが正面に見える。今日は東側にトラバースして温泉マークの付いている東側の沢の上に出る。ここを登り詰めたところが金冠山北東谷である。本日は曇りの天気予報だったが、太陽が出て気温が上昇してきている。通常ならばラッキーなのだが、今日は途中通過したルンゼ帯両側岸壁の上部に積もっている大量の雪のブロック崩壊が気がかりである。早々と頂上は諦め、金冠山手前から滑降することにした。



北東尾根から金冠山と北東谷を望む

黒倉山

長野と新潟県境の脊梁となる関田山脈は、無積雪期には信越トレイルとして多くのトレッカーが訪れる。関田山脈の新潟県側は急な崖になっており、土砂崩れの痕も多く見られる。幸田文の書いた「崩れ」には十日町市松之山の土砂災害が記されているし、上越市の板倉には地滑り資料館なるものがある。この辺りは、これまでも数々の災害に見舞われている崖崩れや雪崩の多発地帯である。東日本大震災の翌日、関田山脈を震源とする震度６強の地震が起き、十日町市や栄村で多くの雪崩や土砂崩れが発生した。その当日、関田山脈の三方岳の北壁を滑る予定であったが、宮城や岩手の津波の惨状を見て、それと何かイヤな予感があって登山を中止した。これより２ヶ月経過した５月の中旬に残雪の北壁の谷を見に行った。まさに震源地であったこの場所は、新緑の芽吹きの美しさと対比するかの様に大量のデブリと崩れた土砂で谷が覆い尽くされていた。予定通り登山に出かけて地震の時にこの場所にいたら、昔のこの地域の伝説に出てくる人柱になって、まだ雪か土砂の下に埋もれているのかもしれないと思った。命を拾った感じがする。何れにしても、新潟側が崖になっているのは大地震による土砂崩れによるものなのだろう。急斜面の滑降を指向すると、崩れの場所と無縁ではいられない。

さて、黒倉山は関田山脈の西側に位置し、通常は長野県側の温井部落から登られる鍋倉山から足を伸ばす。私の場合は新潟県側の板倉の柄沢部落から、最も雪深い２月頃に登る。メロウな斜面の長野県側とは様相が異なり、北西の新潟県側は急に落ち込んでいる。滑降ルートの候補は何本かあるが、最も急なのは最高点 1242mの西側ピークの真っ白な北西斜面である。ここは滑り初めの谷状のオープンバーンが傾斜 50 度で、頸城平野を見下ろしながらの滑降はまさに落ちていく様な感覚。中間部の無積雪期に滝がある所を過ぎて傾斜が緩んでくると、雪崩の恐怖感から解放されて一段と深いパウダー滑降を満喫できる。

雪は、肉眼で見えるぐらいの数mmの６角形結晶が積もっている時が最も比重が軽い。気温が低すぎると結晶成長が不完全だったり、あるいは結晶の枝の長さが短かったり、もちろん気温が高すぎても結晶が溶けてしまって重い雪質になってしまう。気温が低すぎても、もちろん高すぎても駄目で、適度な湿度も必要であり、上越地方の山はこの条件を満たしているようである。黒倉山北西の正面壁を安心して滑降できるぐらい雪質が安定している日はそうはなく、雪質に少しでも不安を感じる場合は正面脇の傾斜がやや落ちる疎林を滑るのだが、それでも黒倉山北面のパウダースノーは何時来ても裏切られることなく軽くて良質である。

黒倉山北西壁を滑り終えて

米山

どこから見ても三角錐の米山は展望と信仰の山である。人気の山であり、冬でも登る人は多い。但し尾根が細いせいか山スキーをする人は少ない。少雪の年は藪でスキーが出来ないので毎年は登れないが、これまで北尾根の吉尾コース、水野部落からの南西尾根、西尾根の大平コースを何度も登り滑降した。

水野部落からの南西尾根は、805mピークから一旦下って登り返すところの雪庇が大きく、これを避けるために西側を巻いてスキーを担いで登るところの胸までのラッセルがきつい。全体的にこの尾根は日本海からの季節風を横からまともに受けるので、標高900mクラスと思えないほど雪庇が大きく張り出している。雪庇を踏み外さない様に、特に視界が悪い吹雪での滑降には注意が必要。標高 600mから林道をショートカットして下る所は真っ白な斜面で、この尾根の最後のハイライトである。

頂上小屋のノートを見ると、冬には殆どの人が大平部落からの西尾根を伝って登っている。西尾根にはトレースがあり、日本海を背に楽に登って行ける。天気が良くて雪崩の心配があまり無いときには頂上から北東斜面を滑る。ここは季節風で運ばれた大量の雪による立木がほとんど無い広い斜面が続いている。あまりにも快適なパウダー斜面なのでどこまでも滑っていきたいが、下は水流が出ているだろう。標高差 300m程滑って頂上へ登り返す。大平部落への下りは、登りに通過した西尾根上の 711mピークに登り返さずに西北西の沢を下る。スキーの機動力を生かしてあっという間に大平に着く。

番外　春日山城

2009 年のＮＨＫ大河ドラマ「天地人」の舞台にもなった春日山城だが、少雪の近年はスキーが出来るほどの雪が積もらなくなった。数年に一度の豪雪の年だけの楽しみである。毘沙門堂からの谷や杉の林の間を縫って下ったりする。春日山城の城主だった上杉謙信は、能登畠山氏の七尾城を攻略した祖先の仇ではあるが、こうしていると不思議な気分である。戦国時代に鉄砲と同時にスキーが伝来したならば、謙信もこのような冬の楽しみを見つけただろうか。

学生時代から始めた山スキー歴が 30 年近くなり、500 日ぐらい雪山を滑降した。誰に教えられることなく、独りで我流のスキーテクニックを磨いてきた。ここ 20 年は仕事に

家庭に忙しいので、泊まりがけの山行など持っての外、半日だけの短い時間だがそれなりに充実はしている。その殆どが単独行だが、家族に迷惑をかけずに無事故で過ごすことができたのは何よりである。雪崩や転落による事故が起きると助けてくれる人がいない単独行は危険であり他人には勧められないが、結構慎重な方だし判断を誤らない限り安全であるともいえる。複数で滑ると 2 人目が滑るときに最も雪崩が起きやすいというデータもある。それでも何時も夜明け前の真っ暗な中を一人で登り始めるときは少し気持ちがブルーになるし、雪質が微妙で判断に悩むこともしばしば。緊張感を保ちながら登り続けるのは大変だが、天候や雪質が悪い場合は無理をしないであっさり頂上を諦め安全なルートに変更する考えは、長く続けるのに必要と悟っている。北アルプスにも滑りに行くが、豪雪地帯の近郊にこれだけ面白いルートが無数に存在する、この恵まれた環境を享受していたい。

近年のスキーの道具と技術の進歩は目覚ましく、100 年前のレルヒさんが現代の我々がパウダーの急斜面をかっ飛んでいくのを見るとびっくりするだろう。圧雪されたゲレンデでは滑りにくいと思うが、最近のパウダー専用マシンは中心が最も太い逆ベントや、トップからテールにつれて徐々に細くなる逆三角形など何でもありという感じだ。軽いパウダースノーではスキーの選択肢が広がるし、様々なスキーに適応した色々な技術で自由に滑れる楽しみがある。僕自身はレルヒさんの頃の２mをはるかに越える長尺寸胴の幅広スキーでパウダーを滑ってみたい。イージーに滑れる短いカービングスキーも飽きたし。

秋田の片田舎で育った子どもの頃、長靴を皮バンドで止めた（カンダハーというビンディング）スキーを履いて雪原のウサギを追いかけていたのが自分の山スキーの原点である。この時の印象を懐いたまま半世紀近く経とうとしている。何時までここに住むかわからないが、これからも自分なりのルートを探して妙高、頸城の山々を彷徨することだろう。

現役生のページ

主将あいさつ

こんにちは、現役主将の平松誠です。2011 年度は１～４年生、総勢 37 人で活動してきました。今回は、今年度の現役生の活動を皆の感想を通して、紹介していきます。

【１．夏合宿】

北アルプスパーティー

日程：９月７日～13 日

Ｌ：五島 雄太　ＳＬ：伊沢 麻衣子

ルート：折立→薬師岳→雲ノ平→鷲羽岳→槍ヶ岳→奥穂高岳

・最後の夏合宿は何としても北アルプス。２年の夏合宿、台風で槍のほんの手前で下山したときから、このリベンジを必ずや果たそうと決めていました。折立から入り、初日から我らが晴れ女の力で絶好の登山日和となり、気持ちよく歩きました。２日目も順調に行き、明日からは百名山のオンパレード！と思いきや翌日起きた時にはガスが一面に。歩き始めても雨風が強くなるばかり、水晶は端から諦めていたものの、鷲羽が諦めきれず強行、これが判断ミスでその後は酷いものでした。皆が全身びっしょり、翌日には体調を崩してしまう人も。槍の手前まで来た時、再び途中下山を考えなければならなくなりました。しかし、それでも何とか登り切り、そこで目の前に聳えるは念願の槍ヶ岳。皆の頑張りに感謝し、その後は快調で、奥穂高岳では東に御来光、西には仲秋の名月とジャンダルムという奇跡的な絶景を堪能して、７日間に及ぶ人生最高の山行となりました。（３年生・五島）

・夏合宿が始まる前、私の経験の中で最も日程が長い山行ということもあり、心中は期待よりも不安でいっぱいでした。しかし、いざ山に登ってみると、確かに道程は私にとってなかなか大変なものでしたが、目の前に広がる美しい景色に感動と興奮を覚えずにはいられませんでした。また、体調が優れない日があったりするなど、パーティの方々に迷惑をかけてしまったこともありました。そんなとき、申し訳ないと思いつつも、皆さんの優しさにふれ、それがとても温かかく、有難かったです。山の景色は素晴らしいもので、それ

らをみられたことはとてもうれしい経験でしたが、それと並んで、今回の団体行動での経験は、私にとって新鮮で、貴重なものになりました。山行の最終日に奥穂高岳で御来光見たときの感動は、胸にくるものがありました。長いようにも短いようにも感じた夏合宿が終わり、私は今、夏合宿に行けてよかった、この経験ができてよかったと思っています。（１年生・野本）

中央アルプスパーティー

日程…9 月 5 日～13 日

Ｌ:平松 誠　ＳＬ:大嶋 ひかり

ルート：御嶽山→キビオ峠→木曽駒ヶ岳→空木岳

・2011 年９月５日早朝。中央アルプスパーティー８人、金沢駅出発。

今回の夏合宿では独立峰の御嶽山を踏破し、その後は空木岳まで縦走を行う予定だった。メンバーの気合は十分、体調も万全、装備もチェック済み。私達は大きな期待と少しの不安を胸に中央アルプスに挑んだ。しかし、残念ながら全日程が予定通りにいくことはなかった。下調べの甘さから行程変更を余儀なくされたり、暴風のため沈殿したりと夏合宿には付き物のトラブルも発生。パーティーとしてはもちろんだが、各々で反省すべき点も多かった。それでもメンバー全員が元気で楽しく過ごせたことは何よりだったし、今回の夏合宿が１人１人に何らかの影響を与えたことは確かだろう。ハプニングはあったものの、全体的に見ればとても充実したものだった。ありがとう中央アルプス、ありがとう中央アルプスパーティー!!!（3 年生・大嶋）

・９月５日に始まり中央アルプスを縦走した夏合宿は、今でもはっきりと記憶に残っている。というのもこの夏合宿が今まで自分が経験してきた登山活動に比べて、とても大規模なものだったからだ。登山日程９日間、前日の準備を含めれば 10 日間にも及ぶ大がかりな登山計画。あまりの大規模さに計画書を見た時から興奮していた。興奮続きのままに始まり、終わった夏合宿だったが、終えてみて自分が精神的にも肉体的にも大きく成長したことが分かる。それだけでなく登山していて色々と得るものがあったと自分で思う。その中でも私にとって最も有意義だったことは、読図や登り方の様な、山に関する知識を真の意味で活用できるようになったことだ。具体的には知っている知識を登山中に活用し、考えて登るようになった。それに合わせてこれからも山に関する知識を得て、それを実践の中で活用していきたいと思えるようになったことは、何よりも大きな変化だと思っている。（１年生・出倉）

南アルプスパーティー

日程:　8 月 23 日～30 日

Ｌ: 渥美 翔大　ＳＬ: 飯島 悠紀子

ルート: 甲斐駒ヶ岳→仙丈ヶ岳→北岳→間ノ岳→農鳥岳

・現役最後の夏合宿を南アルプスで過ごした。北、中央のアルプス、北海道にも行ったものだから、最後は南アルプスで締めようと思い意気揚々と行ったのはいいものの晴れたのは初日の甲斐駒ケ岳と下山日だけで、その他は見事に雨とガスに悩まされた山行になってしまった。他のパーティーはほとんど晴天に恵まれたようで、かなり嫉妬していたのは内緒である。だが、やはり時折見ることのできる 3000 メートル級の山々からの景色は格別だし、登ること自体の楽しさはいくら天気が悪かろうが楽しいものであるし、まったく退屈する

ことなく、いつも笑顔でいれたのもパーティーのみんなのおかげであると思う。
３年間はあっという間で、もう最後の夏合宿かと行く前はなんとも言えない思いであったけれど、３年間で一番楽しかったし、他の登山者と違って多人数で山に行くことができるのもワンゲルの良さであることを改めて認識できた良い山行であった。
（３年生・渥美）

・８月末に行った夏合宿、南アルプスの山行は、それまでの石川県内の山行のものとは違った良い経験ができた。天気が悪いときもあったが、登山経験の少ない自分としては、数々の 3000m級の山を登った達成感は大きかった。南アルプスの山行を行う前は、ついていけるかどうか心配があったが、なんとか無事に終えることができてよかった。しかし、３日目の仙丈小屋に向かう際に、バテて周りの人に迷惑をかけてしまい、非常に申し訳なかった。また、役職としての会計の仕事は、大金を管理するということで大変だったが、収支を合わせて終えることができたのでよかったと思う。上回生の方は、それまでの山行でもそうだったが、非常に頼もしく、さらに山行の中で様々なことを教えてもらった。反省すべき点を反省し、その知識を今後に活かしていきたいと思う。（１年生・愛宕）

【２．ＰＷ等】

冬合宿　2010 年 12 月 26～27 日

・金沢大学ワンダーフォーゲルは 2010 年の 12 月下旬に冬合宿として１泊２日で荒島岳に登りました。当初の計画では中出登山口から入山し、小荒島岳を通り、シャクナゲ平でテント泊をしたのちに、荒島岳に登頂するという予定でした。しかし、2010 年は荒島岳でも積雪量が１ｍを超えており、ラッセルでの登山は困難を極めました。僕はここで初めてラッセルを行いましたが、高く積もった雪は予想以上に重く、雪を踏み固めることも次の一歩を踏み出すことも想像以上に大変な作業だったので、気温が氷点下だったにもかかわらず、すぐに汗だくになってしまいました。結果として日没後も少し行動したにもかかわらず、稜線にたどり着くのがやっとで、２日目も天候が良くなかったので、すぐに下山することになりました。あまり進むことができずにもどかしい思いをすることも多かったですが、夏とは違った冬の山の大変さ・危険・美しさに触れることのできた収穫の多い合宿となりました。（２年生・吉田）

雪上訓練、2011 年２月５～６日

・雪上訓練は医王山で行ないました。医王山は積雪していないときから訪れている山で金沢大学ワンダーフォーゲル部には親しみのある山だと思います。しかし、僕たちにとってある程度は知り尽くされ、何度も歩いたことのある山は積雪期となるとまるで別の山を歩いているかのように感じられるほど姿を変えていました。今までは違った景色、積雪のために姿を消した道、慣れ親しんでいる山にただ雪が積もっただけと考えていた私は医王山のあまりの変わりように驚きました。雪上訓練としてはピッケルを使った滑落停止、雪洞づくり、ゾンデなど冬山で使用される道具の使い方等を行ないました。具体的な技術を学ぶとともに寒さやルート探索の難しさなどから冬山の怖さを知ることも雪訓から学べました。（２年生・坂田）

獅子吼ＰＷ　2011 年６月 25 日

・初めての PW だということで、どんな山行になるのだろうかと期待に胸を膨らませて登ったが、ガスと大雨にやられてしまった。朝から雲行きが怪しかったが、何とかなるだろうと根拠もない自信を抱いて登山したのだ。登山口から奥獅子吼山へ向かう途中で大雨が降り、転倒したり木々に引っかかったり苦戦し、到着しても「360°絶景パノラマをご覧ください」の看板の周囲は何も見えず、スカイ獅子吼へ向かう途中はもはや沢下りといえるほどであった。ただ、スカイ獅子吼では少しガスも晴れ、下界を見渡すことができたので山に登ったという実感がありよかったと思う。この山行はＰＷらしかったと思う。吉田さん曰く、「この大雨を経験すれば、もう怖いことなんてないよ。」である。大雨の中歩く練習や、サブザックカバーを忘れたことによる反省など、いろいろなことを学ぶことができた。ただ、次回行くときは晴れてほしいと心から願う。（１年生・伊藤）

北アルプス PW、2011 年８月 16～19 日

・このＰＷは「とにかく北アルプスを縦走する！」という予定だった。具体的には称名滝登山口から入山し立山、薬師岳、雲ノ平を通って折立から下山するというものだ。メンバーは筋力トレーニングをし、ハイドレーションシステム（行動しながらでも水分が摂取できるよう、チューブを口にくわえるもの）を購入して準備万端で山行に臨んだ。しかし、山行初日から天気が悪い。初日の行程は予定どおりに消化できたが、初日の夜、天場で暴風雨にあい、テントが水浸しになってしまった。二日目も天候が回復せず、ラジオの天気予報で停滞前線が接近していると聞いたので三日目に下山することになった。結局、不完全燃焼のまま立山の室堂からバスで下山ということになってしまったが、メンバーの安全を最優先したリーダーの判断は正しいと思う。また行くぞ！北アルプス！

（１年生・平原）

富士山 PW、2011 年８月 18～21 日

・今回の富士山ＰＷの目的は、一日で富士山を登っちゃおうというものでした。そこで、前日に富士山に到着し体を慣らしてから早朝出発で登りはじめ山頂でお鉢めぐりをして日本一の景色を楽しみ下山するという華麗な計画が立てられ、このＰＷは始まりました。ところが、このＰＷは悪い意味での予想外がたくさん待っていました。

まず、実際に富士山の五合目についたのは前日どころか日付の変わる深夜零時ごろに何故かなってしまいます。当日、寝不足の目をこすりながら我々は歩き始めますが、今度は天気が悪くなり始め、神社についたころには、ひどい雨とガスで景色はまったく見えませんでした。山小屋で日本一高いラーメンを食べつつ、軽い高山病で頭がズキズキ痛む我々は、一刻も早く下山しようということになり、剣ヶ峰だけをまわってから一目散に下山しました。結果的に散々な富士登山となってしまいましたが、個人的には登頂できてうれしかったです。（１年生・山岸）

槍穂 PW、2011 年９月９～12 日

・昨年(2010 年)の夏合宿が終了してから、僕はもう一度槍穂に登りたいとずっと考えていました。夏合宿が台風の影響でほとんどの日程を消化できずに終了したためです。本来なら夏合宿で行ったはずの槍穂へのリベンジは１年越しの計画となりましたが、今年の９月９日から９月 12 日まで３泊４日の日程でつ

いに実現させることが出来ました。初日はあいにくの悪天候で、槍ヶ岳山荘のテント場でも沈殿や下山を覚悟するほどでした。正直この時点では「今年もダメか」という気持ちでいっぱいでした。しかし、次の日からは一転して好天に恵まれ、槍ヶ岳、横尾山荘、涸沢を経て北穂高岳、涸沢岳、奥穂高岳と計４ピークに登頂しました。どのピークでも素晴らしい景色と達成感が味わえました。今回このＰＷは計画段階から様々なことを勉強する機会を与えてくれたＰＷでもありました。素晴らしい山の記憶と、とてもいい経験をさせてくれた有意義な山行であったと思います。（２年生・古田）

空木岳 PW、2011 年 10 月８～10 日

・「ワンゲルに入ってよかった。」４回生として数少ない山行だった空木岳ＰＷでは山に登る魅力を再確認し、ワンゲルで過ごした４年間を振り返る山行となりました。
私は 10 月８日～10 日の３連休に中央アルプス空木岳に行ってきました。メンバーは奇しくも４回生ばかり４人でした。行程は２泊３日で千畳敷より空木岳まで縦走する、余裕を持った行程でした。山行は３日間晴天に恵まれ、紅葉の秋山を堪能することができました。私は、ワンゲルを登山というツールを通じて仲を深め楽しい思い出をつくる部活だと考えています。今回短い日程とはいえ、気心の知れた同回生と空木岳に行くことで、そうしたワンゲルの魅力を確認することができました。もちろんそれは同期だけではなく先輩後輩との関わりで築いてきたものです。そうしたかけがえのない時間を過ごしたワンゲルの人たちと、卒業してからもまた山に登りたいと思い、空木岳を後にしました。
（４年生・白石）

山小屋作業、2011 年 10 月 22 日

・昨年は犀川ダムに至るまでの、道路が通行止めとなっていたため、中止となった山小屋作業。今年度は、久富さんを初めとしたＯＢの方々と、渥美リーダーを中心に現役生 21 名の合同作業を予定していました。しかし、当日は雨。犀川ダムまでは行ったものの、悪天候のため、現役生は作業を中止し、帰ることとなりました。現在では、山小屋作業経験者が、３年生以下で３名となってしまいました…僕は、来年度こそは、山小屋作業を実現したいと強く思っています。
金大ワンゲルの先輩方の思い出がつまったベルクハイム、そして高三郎山。先輩方が残してくださった伝統を、是非後輩にも伝えて行きたいと思います。そして、ＯＢの方々、車での送迎や、差し入れ、本当にありがとうございました。
来年こそは…待ってろ、ベルクハイム、そして高三郎山！（３年生・平松）

主将後記

いかがでしたか。今年度は１年生 10 名を新たに迎え、ＰＷも数多く出るなど、活発な活動ができたと思います。主将としては、皆の安全を第一に考えました。未熟な主将でしたが、協力してくれた部員の皆に本当に感謝しています。来年度以降のみんなの活躍にも期待しています。

また、学年が上がるにつれて、金大ワンゲルの伝統を紡いでくださった数多くの先輩方に対する感謝の念が強くなってきました。僕たちが当たり前のように山に登れるのも、先輩方が残してきてくださった数多くの財産のおかげです。そのことを忘れずに、これからも、山に登り続けたいと思います。本当にありがとうございます。

それでは！

ＫＵＷＶＯＢ会　会計報告

（２０１０年１２月１日～２０１１年１１月３０日）

【 収 入 の 部 】

ＯＢ会費納入	345,000
寄付	60,000
森のうたＣＤ販売収入	43,200
預金利息	176
計	448,376

【 支 出 の 部 】

ＯＢ会報（やまざと）№２５作成費	194,250
ＯＢ会報（やまざと）№２５発送費	38,442
山小屋酒場補助(材料費他)	22,360
役員会議費	1,420
事務用品費	6,325
諸雑費	400
振込手数料	2,205
計	265,402

【 差 引 剰 余 金 】

前回（2010.11.30）繰越金	1,324,741
収　入　の　部	448,376
支　出　の　部	265,402
差　引　剰　余　金	1,507,715

編集後記（事務局から）

ＯＢ会会報「やまざと」vol.26 も原稿を送っていただいた方々をはじめとした皆様のご協力のもと、何とか年末発行にこぎつけることが出来ました。原稿をお寄せいただいた方々には改めて感謝申し上げます。

最初のページにも載せましたが、今年は何と言っても 3 月 11 日の東日本大震災とそれに伴う福島原発事故に尽きるのではないでしょうか。幸いなことに金沢は被害もなかったのですが、ＴＶや新聞で報道されるショッキングな光景には心を痛めました。ＯＢ会の皆様の中にも身内や知り合いの方が被災されたという方もいらっしゃることと思います。先日、福島県在住の方と食事をする機会があり、いろいろな話を聞きましたが、被災された方の生活はやはり想像以上に大変なようですし、そのような話を聞くと、自分たちが日々送っている「普通」の生活の有難さに感謝しなければいけないと反省させられます。被災された方々が「普通」の生活に戻るには、まだしばらく時間は必要でしょうが、その時が少しでも早く訪れるように改めて願いたいと思います。

また、近畿支部、関東支部に続き、中部（東海？）支部の立ち上げの話も出ています。愛知県を中心とした中部地区の方はぜひ 15 頁～16 頁をごらん下さい。

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会　会報誌「やまざと」vol.26
発　行　日　2011 年 12 月
発　行　者　久富 象二（ＯＢ会会長・20 期）e-mail chmxm643@ybb.ne.jp
編集・印刷　デザイン・プリーズ

ＯＢ会事務局　〒920-0831 金沢市東山 3-19-4　鳥越 伸博（23 期）TEL(076)252-6953
e-mail　（ＰＣ）tori3512@ybb.ne.jp
（携帯）n-toripapa.860510@docomo.ne.jp
ＯＢ会ホームページ http://www.kuwv.net　管理人／奥名 正啓（15 期）
ＯＢ会費払込口座（口座名義：金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会）
郵便局（通常払込）00780-3-14120
ゆうちょ銀行〇七九支店　当座預金 No.0014120
北國銀行本店　普通預金 No.223703

- ＯＢ会は皆様のＯＢ会費で運営しております。ＯＢ会の趣旨にご賛同いただける方で、会費納入をお忘れの方は、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。（ご自分の状況をお知りになりたい方は、上記ＯＢ会事務局鳥越まで e-mail 等でお問い合わせください）
- 住所が変わられた方は、お手数でも事務局までお知らせいただけると幸いです。
- 奥名さんから定期的にｅ-mail でＯＢ会通信を配信していただいております。配信をご希望される方はご自分のメールアドレスを奥名さんまでお知らせください。
- 奥名さんのメールアドレスは　ma-okuna@nature.email.ne.jp　です。